

茨城県教育財団文化財調査報告第396集

水戸城跡

水戸地方検察庁仮庁舎建設事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27年3月

国土交通省関東地方整備局営繕部
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第396集

水 戸 城 跡

水戸地方検察庁仮庁舎建設事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27年3月

国土交通省関東地方整備局営繕部
公益財団法人茨城県教育財団

序

国土交通省関東地方整備局の営繕部では、「官公庁施設の建設等に関する法律」に基づき、関東地方管内（東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県・山梨県・長野県）にあるさまざまな国の建物（行政施設、教育、文化施設、医療、社会施設及び試験研究施設）の整備や保全を行っています。

水戸地方検察庁仮庁舎建設工事は、検察庁舎の改築に伴い計画されたものです。しかしながら、この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である水戸城跡が所在することから、これを記録保存する必要があるため、当財団が国土交通省関東地方整備局営繕部から委託を受け、平成25年12月から平成26年1月にかけて発掘調査を実施しました。

本書は、水戸城跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります国土交通省関東地方整備局営繕部から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、水戸地方検察庁、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対しまして深く感謝申し上げます。

平成27年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局営繕部の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年度に発掘調査を実施した、茨城県水戸市北見町1番11号に所在する水戸城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成25年12月2日～平成26年1月31日
- 3 整理 平成26年9月1日～11月30日
発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 酒井雄一 平成25年12月2日～平成26年1月31日
首席調査員 奥沢哲也 平成25年12月2日～12月31日
調査員 盛野浩一 平成25年12月2日～平成26年1月31日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員盛野浩一が担当した。
- 5 金属製品の保存処理及び腰帯具（巡方）の成分分析については、株式会社吉田生物研究所に委託し、分析結果は付章として掲載した。
- 6 第8号竪穴建物跡から出土した墨書土器の釈読については大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事平川南氏・東京大学大学院井上翔氏に依頼した。

凡 例

- 1 当城跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 42,120 \text{ m}$ 、 $Y = + 57,720 \text{ m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。





遺構 P - ピット SD - 溝跡 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑
遺物 M - 金属製品 Q - 石器 T - 瓦 TP - 拓本記録土器
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉		火床面・被熱痕				
	竈部材・黒色処理・漆喰		油煙				
●	土器	□	石器	△	金属製品	- - -	硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(4) 瓦の計測値は次頁に示した通りである。軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦の計測部位と名称については、以下の報告書を参考にした。

中野高久 『東京新宿区 尾張徳川家下屋敷跡Ⅵ 敷地内病棟建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』独立行政法人国立国際医療研究センター 共和開発株式会社 2013 年 3 月

加藤晃 「瓦類」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部 7 号館地点 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 1』1989 年 3 月

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

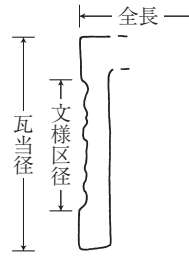
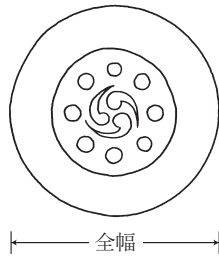
変更 SD 5 → 第1号水路状施設 SE 3 → SK222 SI 6 → 第1号竪穴遺構 SI12 → SI 6

整地層 → 第1号整地跡

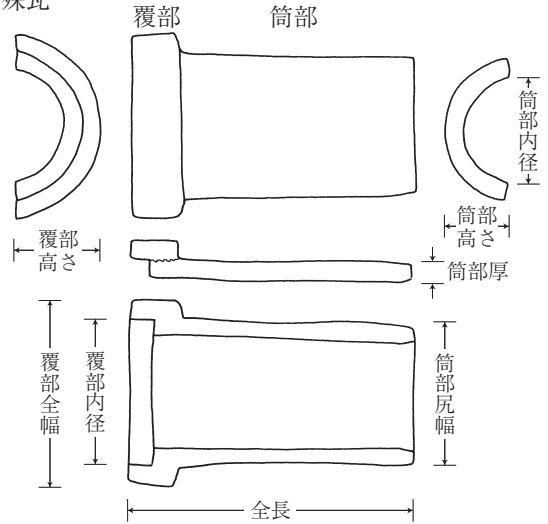
欠番 SK178

瓦計測部位凡例図

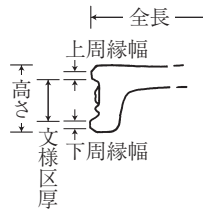
軒丸瓦・軒棧瓦 巴部



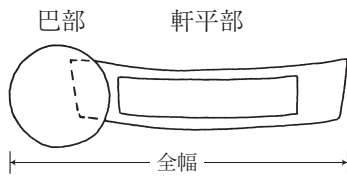
特殊瓦



軒平瓦・軒棧瓦 軒平部



軒棧瓦



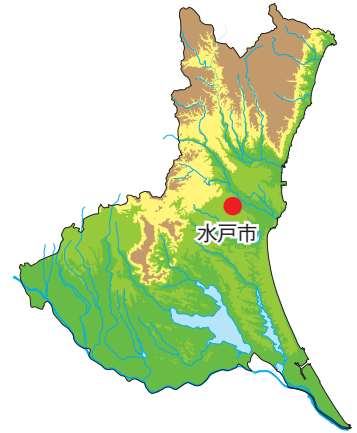
目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
水戸城跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴建物跡	11
(2) 竪穴遺構	31
(3) 土坑	31
2 江戸時代の遺構と遺物	33
(1) 水路状施設	34
(2) 整地跡	36
(3) 土坑	38
3 その他の遺構と遺物	41
(1) 溝跡	41
(2) 土坑	42
(3) 遺構外出土遺物	46
第4節 まとめ	48
付 章	51
写真図版	PL 1～PL 8
抄 録	

水戸城跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

水戸城跡は、水戸市の北部に位置し、那珂川と千波湖・桜川に挟まれた標高約 29 m の舌状台地上に立地しています。当城跡の調査は水戸地方検察庁仮庁舎建設事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、平成 25 年 12 月から平成 26 年 1 月までの 2 か月間、茨城県教育財団が実施しました。



調査の内容

水戸城は水戸徳川家の城として知られ、今回調査した箇所は北三の丸の一面に当たります。調査では、奈良・平安時代（8・9 世紀）の竪穴建物跡 10 棟・竪穴遺構 1 基・土坑 2 基、江戸時代の水路状施設 1 条・整地跡 1 か所・土坑 2 基などが確認できました。主な出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土師質土器、陶器、磁器、石器、金属製品、瓦などです。



調査区遠景



土器の出土状況



平安時代の土器



腰帯具（表・裏）



水路状施設

調査の結果

平安時代の竪穴建物跡からは、^{ぼくしょどき}墨書土器や^{とうす}刀子・^{ようたいぐ}腰帯具（^{じゅんぽう}巡方）といった遺物が出土しており、知識階級の存在がうかがえます。腰帯具が出土した竪穴建物跡は、他の竪穴建物跡より大きく、主柱の一組が斜めに立っている特徴的な構造をしています。また、出入り口の^{はしご}梯子をかけていたと考えられる穴には、土器片を敷き詰め^{きそがた}基礎固めをしていた痕跡が確認できました。

江戸時代の水戸城北三の丸は、水戸藩^{つけがろう}附家老の中山氏を筆頭に、武家屋敷が並んでいました。今回の調査では、屋敷地を確保する前に行ったと考えられる大規模な整地跡を確認しました。那珂川に向かう斜面を削り出したところに、何回にも分けて盛土し整地を行っています。武家屋敷に関わるものとして、ごみ穴となった土坑や、瓦を組み合わせて作った水路状施設（^{あんきよ}暗渠）があります。遺構から出土したものではありませんが、水戸藩と関わりの深い^{しちめん}七面焼や^{まつおか}松岡焼と考えられる陶器の破片も確認しています。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

関東地方整備局では、「官公庁施設の建設等に関する法律」に基づき、水戸地方検察庁舎の改築を計画している。

平成24年10月10日、水戸地方検察庁検事正は茨城県教育委員会教育長あてに、同庁仮庁舎建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成24年10月26日に現地踏査を、平成24年11月27日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成24年12月7日、茨城県教育委員会教育長は、水戸地方検察庁検事正あてに、事業地内に水戸城跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。







平成25年10月15日、水戸地方検察庁から同庁仮庁舎建設工事実施の委託を受けた国土交通省関東地方整備局長（国土交通省関東地方整備局営繕部計画課長）は、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成25年10月25日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局長（国土交通省関東地方整備局営繕部計画課長）あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成25年10月28日、国土交通省関東地方整備局長は、茨城県教育委員会教育長あてに、水戸地方検察庁仮庁舎建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成25年10月28日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局長あてに、水戸城跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年12月2日から平成26年1月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

水戸城跡の調査は、平成25年12月2日から平成26年1月31日までの2か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	12月	1月
調査準備 表土除去 遺構確認		
遺構調査		
遺物洗浄 写真整理		
撤収		

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

水戸城跡は、茨城県水戸市北見町1番11号に所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、北は那珂市・東茨城郡城里町、東はひたちなか市・東茨城郡大洗町、南は東茨城郡茨城町、西は笠間市と接している。当市は、江戸時代に水戸徳川家の城下町として栄え、明治時代以降は県庁所在地として、本県の政治、経済、文化の中心地となっている。

市域の地形は、西部が八溝山地中央部の鶏足山塊に属する標高60～200mの丘陵地、中央部が東茨城台地の北東部にあたる標高20～30mの水戸台地、北部の一部が標高30～40mの那珂台地、北部から東部へ流れる那珂川の流域が標高10m以下の沖積低地からなり、このうち台地部が最も広い地域を占めている。また、水戸台地は那珂川の支流である沢渡川、桜川、逆川によって上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地に分けられ、当城跡は上市台地の先端部に位置している。

上市台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、下層から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。また、低地部は沖積谷に河川堆積物である砂礫層が堆積し、場所によっては有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる¹⁾。

当城跡は、水戸市街地の中心部、JR常磐線水戸駅の北側に位置し、北の那珂川、南の千波湖と桜川に挟まれ、南東にせり出した舌状台地上、那珂川右岸の標高29mの台地上に立地しており、低地との標高差は約20mである。城の構造は、東西に細長く伸びる台地を堀や土塁で区画した連郭式平山城であり、東から東二の丸（浄光寺曲輪・下の丸）、本丸、二の丸、三の丸が配置されている。現在は、学校施設や県三の丸庁舎（旧県庁舎）、県立図書館などが建つ文教地区となっているほか、本丸と二の丸の間の堀がJR水郡線、二の丸と三の丸の間の堀が県道市毛水戸線として利用されている。

今回の調査地は、旧北三の丸のほぼ中央部分にあたる。調査前の現況は旧茨城労働局跡地である。

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する水戸市は、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く確認されている²⁾。ここでは、当城跡に関連する周辺遺跡を中心に、時代ごとに記述する。

旧石器時代は、十万原台地上のニガサワ遺跡、二の沢B遺跡、ドウゼンクボ遺跡などで石器が採集されており、十万原遺跡では石器集中地点や集石土坑などが確認されている³⁾。

縄文時代には、愛宕町遺跡、アラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡などが上市台地の縁辺部に位置し⁴⁾、この地域が早い時期から生活域として利用されていたことがわかる。また、『常陸國風土記』に巨人伝説が記され、古代からその存在が知られていた大串貝塚をはじめ、柳崎貝塚〈40〉や吉田貝塚〈26〉、安楽寺遺跡〈31〉など、那珂川・桜川の流域が豊かな資源を与える生活に適した場であったことがうかがえる。

弥生時代に入ると那珂川流域の台地上を中心に遺跡や遺物が確認されており、上市台地上においては、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが、吉田台地上においては、薬王院東遺跡〈30〉、大鋸町遺跡〈32〉など

があげられる。

古墳時代の上市台地上の遺跡としては、^{あたごやま}愛宕山古墳群があり、国指定史跡である愛宕山古墳が存在している。県内では石岡市の^{ふなつかやま}舟塚山古墳、常陸太田市の^{ぼんてんやま}梵天山古墳に次ぐ全長 136.5m の大型前方後円墳である。また、^{だいわたりにかんが}台渡里官衙遺跡群では豪族居館跡に伴うと考えられている一辺 75m の方形の堀が発見されている⁵⁾。当城跡では、水戸市教育委員会の調査でこの時代の集落が確認されている⁶⁾。吉田台地上の遺跡では、吉田古墳群〈28〉があり、第 1 号墳は近年の調査により石室奥壁に線刻壁画をもつ八角形墳の可能性が高いものとされている⁷⁾。また、大鋸町遺跡では前時代に引き続き集落が営まれている。

奈良・平安時代の当城跡周辺は、^{なかときわ}那賀郡常石郷に属している。当時代の主な遺跡としては国指定史跡の台渡里官衙遺跡群があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、^{かんのんどうやま}観音堂山地区では 7 世紀後半、^{なんぼう}南方地区では 9 世紀後半の時期の異なる寺院跡が確認されている。周辺にはアラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡、台渡里遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡などが分布しており、台渡里廃寺跡を中心としたこれらの遺跡群は、那賀郡の郡庁院、正倉院、寺院、集落が一体となった官衙関連遺跡として捉えられている⁸⁾。また、那珂川対岸には、河内駅家の候補地としてあげられる^{たやはいし}田谷廃寺跡や^{しらいし}白石遺跡が存在している⁹⁾。当城跡では前時代から引き続き集落が営まれており¹⁰⁾、吉田台地上では、^{なかつま}薬王院東遺跡¹¹⁾や大鋸町遺跡¹²⁾で集落が確認されている。

中世以降になると、水戸地方においても戦乱が続き、多くの城館が築かれている。当城跡周辺の主な中世城館跡は、^{だいじょう}大掾氏の一族である^{よしだ}吉田氏の居館と考えられる吉田城跡〈29〉、大掾氏の支城として築かれ、その後江戸氏の一^{えど}族、^{しんじゅう}春秋氏の居城であったとされる^{みかわ}見川城跡、大掾氏配下の^{ししど}宍戸氏の居所とされる^{なかがち}中河内館跡〈13〉や長者山城跡などがある。また、那珂川流域では^{えだかわ}枝川城跡〈22〉、^{ほりぐち}堀口館跡、^{たけだ}武田館跡、^{かつくら}勝倉城跡、^{にしきのくら}西木倉館跡、^{いちげ}市毛館跡、^{しまぎき}那珂台地上においては^{しまぎき}島崎館跡、^{ふくだなかつぼ}福田中坪館跡、^{げんぼやま}玄蕃山館跡、^{はらつぼ}原坪館跡、^{ふじききたんこ}藤咲丹後館跡、^{たかのし}高野氏館跡、^{ほりうち}堀の内館跡、^{あらじ}新地館跡などの多くの城館跡が確認されている。那珂川を望む台地上において、有力領主層を頂点とする領地支配のネットワークがみてとれ、政治的・軍事的に重要な地であったことがうかがえる¹³⁾。

水戸城は、平安末期から鎌倉時代初期に^{ひたちだいじょうぼ}常陸大掾馬場資幹が館を構えたのが始まりで、当初は馬場城と呼称されていた。馬場氏は大掾職を世襲していたため、現石岡市の府中に居住していたと考えられることから、馬場城は支館であり、その規模も小さかったと推定されている。次いで応永 33 年 (1426)、^{かわだ}河和田城主江戸道房が^{みつもと}大掾満幹の留守に水戸城を占拠し、以来 165 年間、江戸氏の支配が続いた。江戸氏時代の水戸城は、居館のあった内城とその外郭である宿城からなり、城郭としての構えが成立したと考えられている。天正 18 年 (1590)、^{おた}太田城の^{さたけよししげ}佐竹義重・^{よしのぶ}義宣が江戸氏を討伐し、本拠を太田城から水戸城へ移し、領国の中心と定めた。内城を本丸、宿城を二の丸とし、また二の丸の外側にも郭を造り、三の丸としたと伝えられている¹⁴⁾。さらに、大掾氏時代からの古い^{みともうじん}水戸明神や^{じょうこうじ}浄光寺のある側にも^{じょうこうじ}浄光寺曲輪を設けるなど、文禄 2 年 (1593) から慶長 7 年 (1602) ごろまで積極的に城郭の修築・拡張をおこなった。城下町においても三の丸の門前に町人町が定められ、城郭は町人町からはっきりと分離されるなど、徳川時代の城郭及び城下町の基礎は佐竹氏の時期に築かれた。慶長 7 年 (1602) 5 月、^{とくがわいえやす}佐竹氏は徳川家康に秋田へ転封を命じられ、同年 11 月には家康の第 5 子^{たけだのぶよし}武田信吉が水戸城に入封する。しかし、翌年病死したため、家康第 10 子の^{よりのぶ}頼宣が城主となる。続いて第 11 子^{よりのぶ}頼房が水戸徳川家の初代藩主となり、水戸藩の基礎をなした¹⁵⁾。この際に家康の家臣であった中山信吉が、頼房に付属されて家老となり、中山氏は水戸藩附家老として代々仕えていくことになる。頼房は寛永 2 年 (1625) に城の大修築を始め、二の丸を本丸とし、^{おおてぼし}大手橋をつくった。寛永 5 年 (1628) には、本丸多聞・二の丸帯曲輪・田町水門の普請が行われ、寛永 15 年 (1638) には、三の丸の南北の郭門・南見付・荒神見付などもつくられた。二の



第1図 水戸城跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「水戸」「ひたちなか」）

表1 水戸城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
①	水戸城跡		○		○	○	○	○	21	市毛上坪遺跡			○	○	○		
2	無名古墳				○				22	枝川城跡						○	
3	東照宮境内遺跡			○					23	武熊故城						○	
4	東照宮境内古墳群				○				24	お下屋敷遺跡		○	○	○	○		
5	梅香火葬墓跡					○			25	水戸南高校遺跡		○	○	○			
6	釜神町遺跡		○						26	吉田貝塚		○					
7	七面製陶所跡							○	27	吉田神社遺跡			○	○	○		
8	五軒町古墳群				○				28	吉田古墳群				○			
9	並松町遺跡		○						29	吉田城跡						○	
10	藤井町遺跡		○	○					30	薬王院東遺跡		○	○		○		
11	柳河町遺跡			○	○	○			31	安楽寺遺跡		○					
12	反町遺跡			○	○				32	大鋸町遺跡	○		○	○			
13	中河内館跡						○		33	大鋸町古墳				○			
14	津田若宮遺跡	○	○	○	○	○			34	横宿遺跡		○	○	○			
15	天神山遺跡		○	○	○	○			35	米沢町遺跡			○	○	○		
16	天神山古墳				○				36	福沢古墳群				○			
17	天神山城跡		○	○	○	○			37	払沢古墳群				○			
18	西中島遺跡		○	○	○	○			38	笠原水道							○
19	上馬場遺跡		○	○					39	下本郷遺跡		○					
20	津田久保遺跡				○	○			40	柳崎貝塚		○					

丸の北西部において、この時期に構築された堀跡と法面を形成する盛土遺構を確認している¹⁶⁾ 城下町に関しては、寛永2年に町人を移住させた田町周辺が下町、それに対して城郭部分の台地上は上町と呼ばれ、整備拡張が行われた。曲輪間を区画する堀もこの徳川時代のものとされている。天保12年(1841)には、徳川斉昭^{なりあき}によって藩校である弘道館^{こうどうかん}が開かれた。その後、幕末の争乱を迎え、水戸城周辺でも倒幕派と佐幕派による弘道館の戦いが起り、明治4年(1871)には廃城令が公布され、翌年、放火によりほとんどの建物が焼失した。その後、第二次世界大戦の昭和20年(1945)の水戸大空襲により、三階櫓^{さんかいやぐら}なども焼失し、現在、当時の様子をうかがえる城郭施設はほとんど残っていない。

※文中の〈〉内の番号は、第1図及び表1の当該遺跡番号と同じである。なお本章は『茨城県教育財団文化財調査報告』第329集を基にし、加筆修正したものである。

註

- 1) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編・地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 皆川修「十万原地区市街地開発事業地内市街地開発事業地埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集 2001年3月
- 4) 註1)と同じ
- 5) 田中裕 太田有里乃 栗原悠 小林佳南子 山川千博 横山真那美 大久保敦史 菅澤由希 下山はる奈「常陸国那賀郡家周辺遺跡の研究」『茨城大学人文学部考古学研究報告』第11冊 2014年3月
- 6) 茨城県教育財団 水戸市教育委員会『水戸城跡(第5地点・第6地点)現地説明会資料』2008年11月
- 7) 水戸市教育委員会『国指定史跡 吉田古墳 一吉田古墳第1号墳の石室調査(第6次調査)現地説明会資料一』2010年11月
- 8) 佐々木藤雄他「台渡里廃寺跡-市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月
- 9) 川口武彦「茨城県水戸市台渡里廃寺跡長者山地区 大串遺跡第7地点」『古代交通研究会 第14回大会資料集 アヅマの国の道路と景観』古代交通研究会 第14回大会資料集 2008年6月
- 10) 註6)と同じ
松林秀和「水戸城跡 茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第362集 2012年3月
- 11) 井上義安『薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990年3月
- 12) 齊藤洋 新垣清貴「大鋸町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」『水戸市埋蔵文化財報告書』第3集 水戸市教育委員会 グランディハウス株式会社 株式会社地域文化財コンサルタント 2005年8月
井上義安『水戸市大鋸町遺跡(仮称)元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988年12月
- 13) 井上琢哉「主要地方道水戸茂木線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 加倉井忠光館跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第294集 2008年3月
- 14) 茨城地方史研究会『茨城の歴史 県北編』茨城新聞社 2002年5月
- 15) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 中巻(一)』水戸市 1968年8月
- 16) 清水哲「水戸城跡 一般県道市毛水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第329集 2010年3月

参考文献

- 茨城県『土地分類基本調査 地形・表層地質・土じょう』「水戸 5万分の1 国土調査」2003年
 茨城県史編集委員会『茨城県史 中世編』茨城県 1986年3月
 茨城県史編集委員会『茨城県史 近世編』茨城県 1985年3月

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

水戸城跡は、水戸市の北部に位置し、上市台地の東端に所在している。遺跡は、北に那珂川、南に千波湖や桜川に挟まれた舌状台地の先端に立地し、遺跡の範囲は東西約 1,100 m、南北約 950 m である。調査面積は 584m²で、調査区域は遺跡の北西部に位置しており、東西約 50 m、南北約 35 m の逆 L 字状の範囲である。

調査の結果、竪穴建物跡 10 棟（奈良・平安時代）、竪穴遺構 1 基（奈良時代）、土坑 55 基（平安時代 2・江戸時代 2・時期不明 51）、溝跡 1 条（時期不明）、水路状施設 1 条（江戸時代）、整地跡 1 か所（江戸時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 12 箱出土している。主な遺物は、土師器（坏・椀・高台付坏・鉢・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・皿・盤・瓶類・長頸壺・甕・甑）、灰釉陶器（長頸瓶）、土師質土器（小皿・焙烙・手焙り）、陶器（播鉢・甕）、磁器（碗・小碗）、石器（紡錘車）、剥片、金属製品（刀子・斧・釘・腰帶具）、瓦（軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦・特殊瓦）などである。

第2節 基本層序

調査区西部の台地上の平坦面（A 1 d6 区）にテストピットを設定して基本土層の観察を行った。テストピット周辺では、第 1 層の上に攪乱層と碎石からなる表土が約 70cm 堆積している。

第 1 層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 10～28cm である。

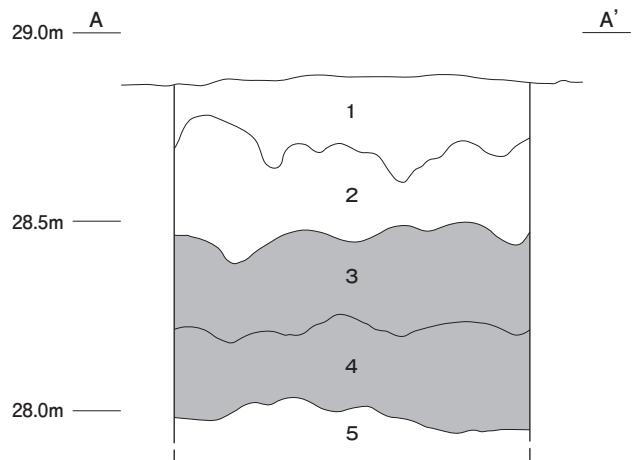
第 2 層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は 12～27cm である。AT と考えられるガラス質粒子を極微量に含む。

第 3 層は、暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は 20～30cm である。色調から第 2 黒色帯上部と考えられる。

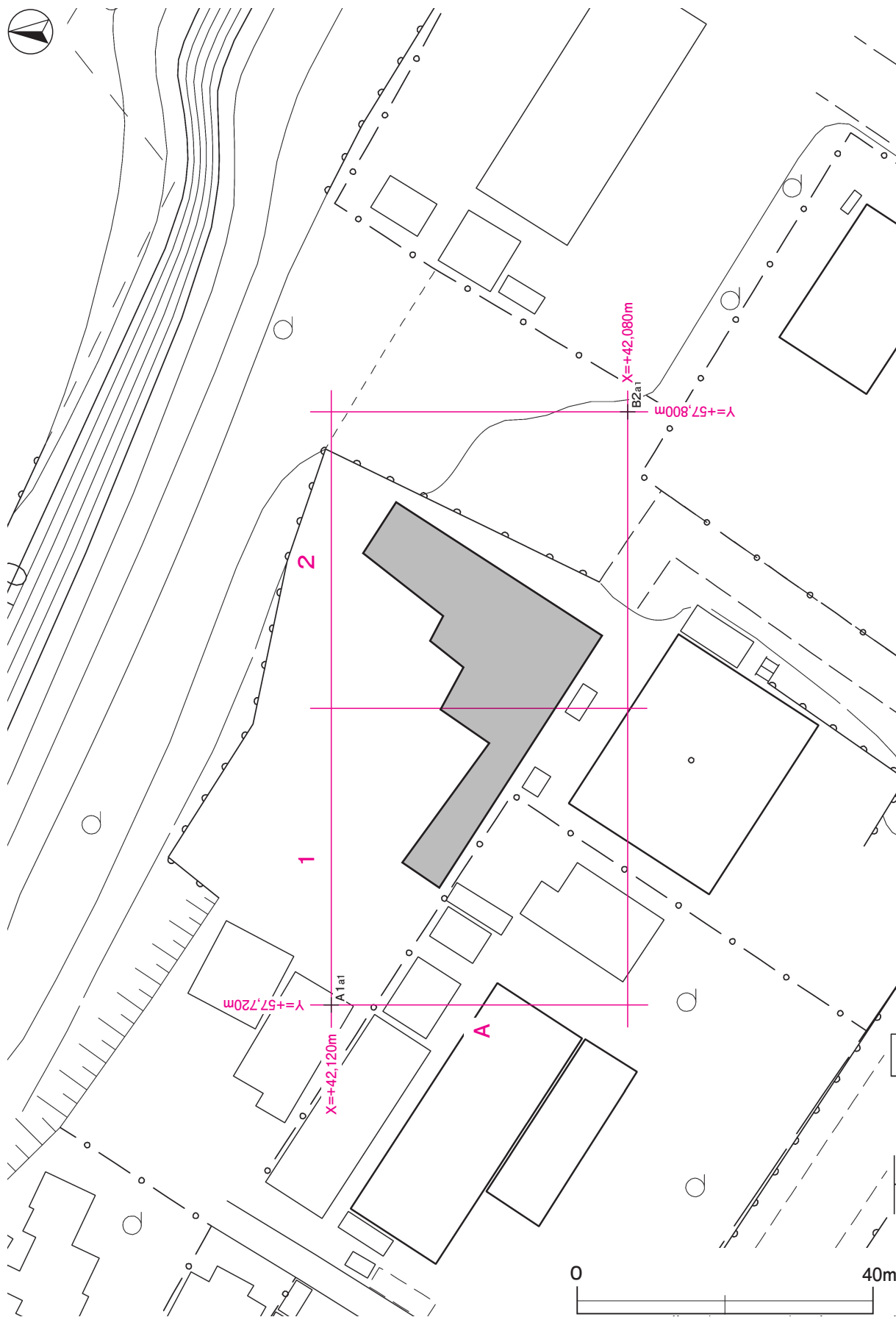
第 4 層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は 17～28cm である。色調から第 2 黒色帯下部と考えられる。

第 5 層は、黄橙色を呈する鹿沼軽石層である。漸移層としてとらえられる部分がほとんどないため、一つの層とした。粘性は極めて弱く、締まりは普通である。層厚は 14cm まで確認したが、下部は未掘のため不明である。

遺構は、調査区域の南側では第 1 層の上面で、中央部では攪乱層が厚く堆積しており、第 2 層中で確認した。調査区域北端では、地表下 2 m まで攪乱されており、遺構は検出できなかった。



第2図 基本土層図



第3図 水戸城跡調査区設定図（水戸市都市計画基本図 DM データ 2,500 分の 1 から作成）

第3節 遺構と遺物

1 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡10棟、竪穴遺構1基、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第2号竪穴建物跡（第4・5図）

位置 調査区中央部のA2f2区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第205・209号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 攪乱を受けている範囲が多く、東西軸は5.11mで、南北軸は5.30mしか確認できなかった。平面形は長方形で、主軸方向はN-7°-Eと推測できる。壁は高さ最大58cmで、ほぼ直立している。南側は攪乱を受けて削平されており、立ち上がりは残っていない。

床 平坦な貼床で、北部が踏み固められており、中央部には焼土が集中している。貼床は、深さ8～30cmの不整形な土坑状の掘り込みに焼土ブロック・ロームブロックを含む第18～31層を埋めて構築している。南壁を除き、確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 攪乱を受けており確認できなかったが、覆土に含まれる粘土や柱穴の配置から判断して、北壁中央部に付設されていたものと考えられる。

ピット 6か所。P1～P3は深さ88～91cmで、規模や配置から主柱穴である。P1は北壁際に位置しており、内傾して掘り込まれていることから、北側の主柱は斜めに立てられていた可能性がある。第1・2層は柱抜き取り後の堆積土で、第3層は埋土である。P3では柱抜き取り痕が確認できた。P4・P5は南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P5の覆土下層から、土師器甕の破片が敷かれたと思われる状況で出土している（PL1）。細片で接合状況も悪いことから、埋設されたものではなく、柱の基礎固めとして土器片を敷いたと考えられる。P6は南壁際に位置しており、壁柱穴と考えられる。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	3 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック中量		

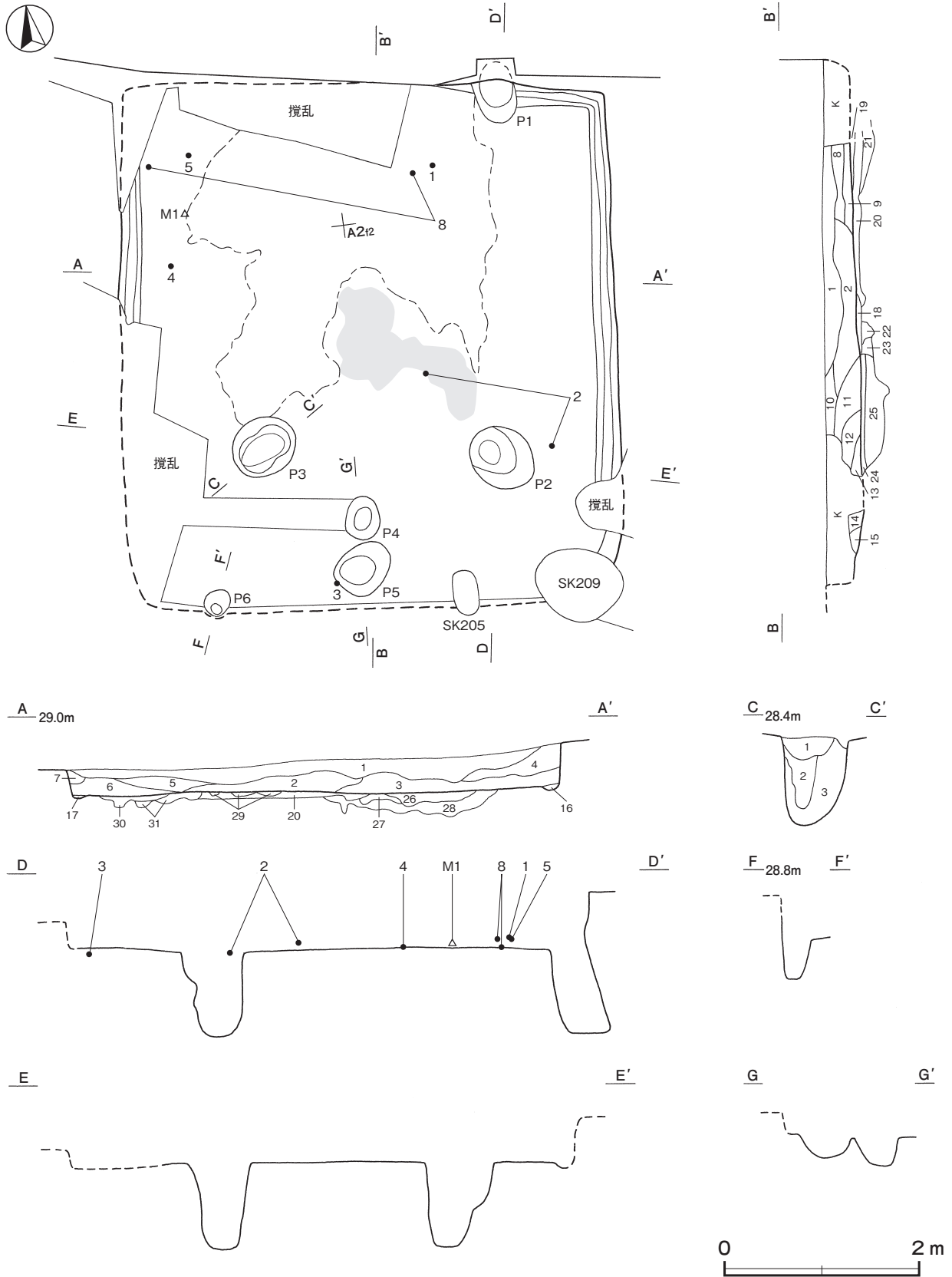
覆土 17層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。第18～31層は貼床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	12 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	13 暗褐色	ローム粒子多量、粘土ブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量
3 黒褐色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量	14 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	15 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量
5 黒褐色	焼土粒子少量、ロームブロック微量	16 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
6 黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量	17 暗褐色	ローム粒子中量
7 黄褐色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	18 暗褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量
8 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子少量	19 褐色	ロームブロック少量
9 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	20 褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量
10 暗褐色	炭化粒子中量、粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量	21 褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量
11 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子少量	22 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
		23 褐色	ロームブロック多量

- 24 黒褐色 ロームブロック少量
- 25 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量
- 26 褐色 ロームブロック多量 (締まり強い)
- 27 黒褐色 ローム粒子少量

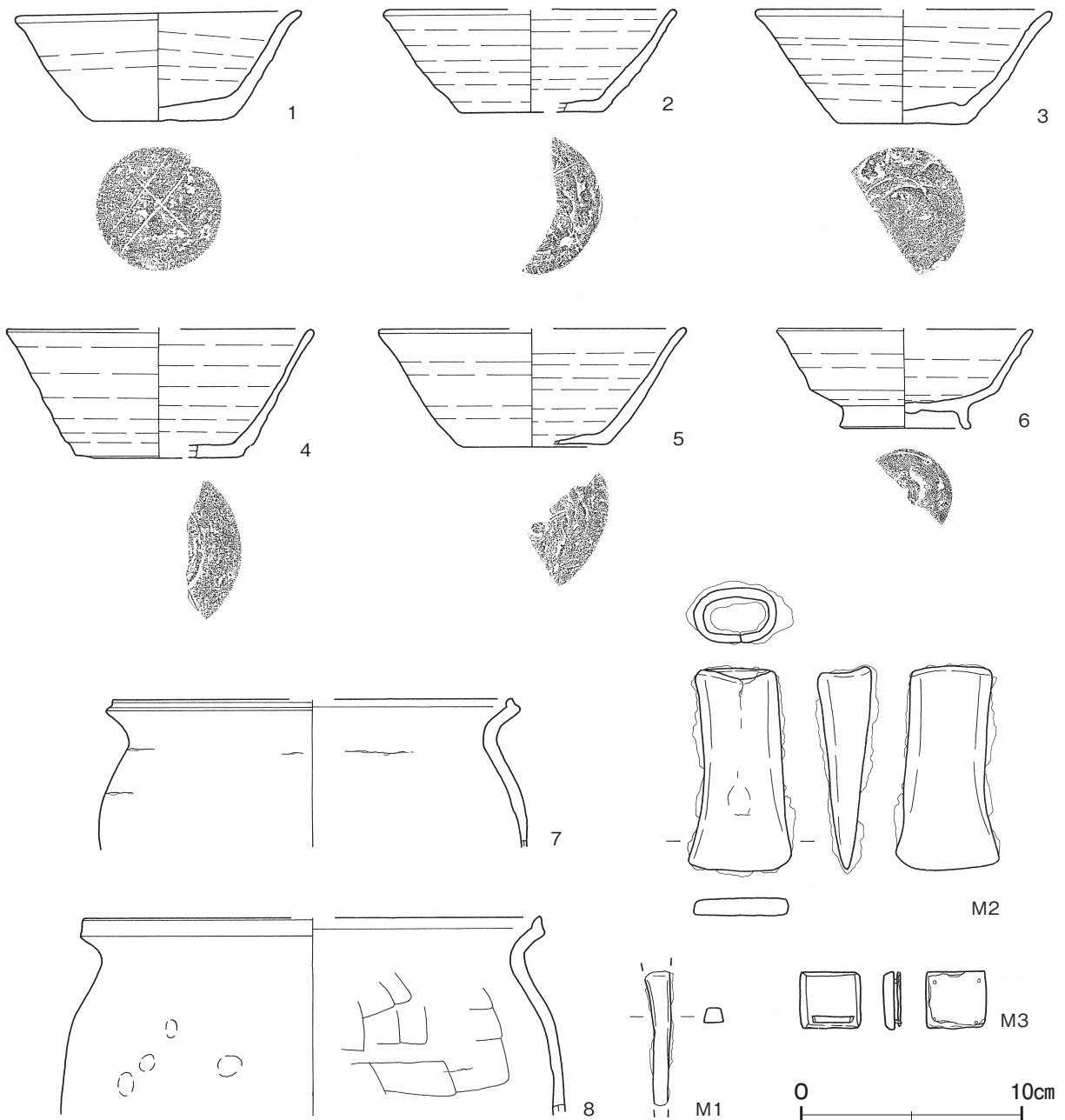
- 28 褐色 ロームブロック中量
- 29 褐色 ローム粒子中量
- 30 黒褐色 ローム粒子中量
- 31 暗褐色 ロームブロック中量



第4図 第2号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 714 点 (坏類 16, 高台付坏 1, 甕類 697), 須恵器片 328 点 (坏類 233, 高台付坏 13, 蓋 1, 盤 8, 壺 2, 瓶類 43, 甕 9, 甌 19), 灰釉陶器片 1 点 (瓶類), 金属製品 6 点 (鏃 2, 鉄斧 1, 釘 1, 巡方 1, 不明鉄製品 1) のほか, 弥生土器片 3 点 (壺), 自然礫 9 点が全域の覆土及び掘方埋土から散在した状態で出土している。出土した土器の大半は小破片で, 埋め戻す際に混入したものと考えられる。1~5・8・M1 は床面から覆土下層にかけて出土しており, 埋め戻しの過程で投棄されたものとみられる。6・7 は掘方埋土中から出土していることから, 構築時に混入したものである。M2 は北西部の掘方埋土中から出土したもので, 完存していることから埋納された可能性がある。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。前段階の建物跡は明確でないが, 貼床の構築土に焼土ブロックを多く含んでいることから, 一度焼失した建物を再建したことが考えられる。構造上の特徴や規模から, 集落の中心的建物であった可能性がある。



第5図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2号竖穴建物跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.0	5.1	5.9	長石・石英・細礫・針状物質	褐灰	普通	底部丁寧なナデ ヘラ記号	覆土下層	95% PL 5 木葉下窯産
2	須恵器	坏	[13.1]	4.7	[6.4]	長石・石英・礫・針状物質	灰	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ ヘラ記号	覆土下層～床面	40% 木葉下窯産
3	須恵器	坏	[13.6]	5.2	6.0	長石・石英・細礫・針状物質	暗灰	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ	床面	40% 木葉下窯産
4	須恵器	坏	[13.7]	5.9	[7.7]	長石・石英・礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ	床面	30% 木葉下窯産
5	須恵器	坏	[13.8]	5.4	[7.0]	長石・石英	灰黄	普通	底部ナデ	覆土下層	20% 木葉下窯産
6	須恵器	高台付坏	[11.6]	4.6	[5.8]	長石・石英・礫・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り 高台貼り付け	掘方埋土中	30% 木葉下窯産
7	土師器	甕	[18.0]	(6.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	頸部外面横ナデ 体部ナデ	掘方埋土中	10% PL 6
8	土師器	甕	[20.8]	(9.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁～頸部横ナデ 体部外面指頭痕 内面ヘラナデ	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	鎌	(6.2)	(1.2)	0.7	(15.9)	鉄	鎌身部欠損 断面方形	覆土下層	PL 6
M 2	鉄斧	9.3	4.7	2.5	185.5	鉄	環状の袋部	掘方埋土中	PL 6
M 3	巡方	2.6	2.8	0.8	(13.7)	銅	四隅留め金具 裏面鍍金残存	覆土中	PL 6

第3号竖穴建物跡（第6図）

位置 調査区西部のA 1 d5区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第172号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側の大部分が調査区域外へ延びているため、北西・南東軸は4.54mで、北東・南西軸は0.84mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で、主軸方向はN-38°-Eと推測できる。壁は高さ16～38cmで、ほぼ直立している。

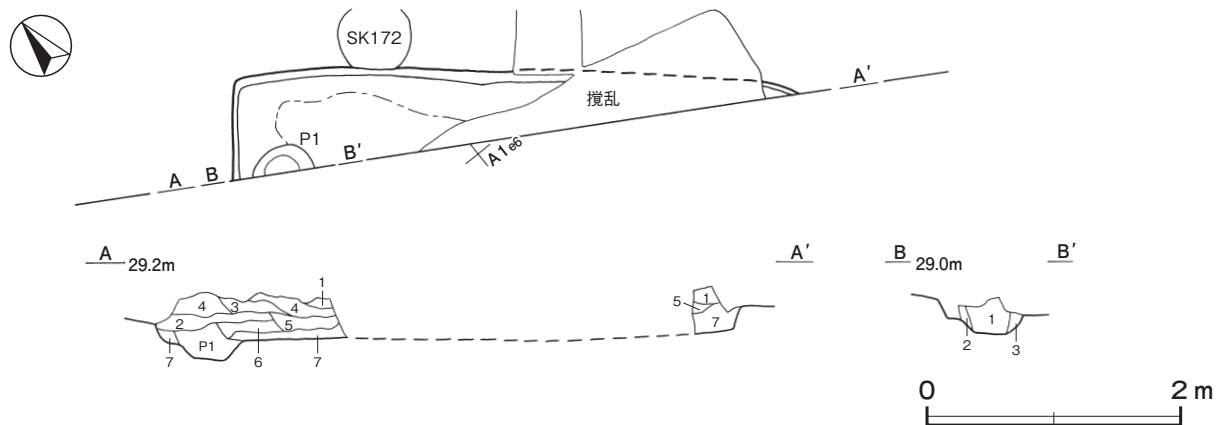
床 確認できた範囲は平坦で、壁際を除き踏み固められている。

ピット P1は調査区域外に延びているため、確認できた深さ19cmで、規模や配置から支柱穴と考えられる。第1・2層は柱抜き取り後の堆積土で、第3層は埋土である。第1・2層の堆積状況から、廃絶後、覆土第7層が堆積した後に柱を抜き取ったと考えられる。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

覆土 7層に分層できる。ロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。



第6図 第3号竖穴建物跡実測図

土層解説

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量 | 5 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック中量, 炭化物少量 | 6 黒褐色 炭化粒子中量, ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 7 黒褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 須恵器片1点(坏類)が, 覆土中から出土しているが, 細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土遺物から判断することは難しいが, 形状や覆土の堆積状況から判断して, 他の竪穴建物跡と同じ奈良・平安時代と考えられる。

第4号竪穴建物跡(第7図)

位置 調査区東部のA2h1区, 標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第174号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南側の大部分が調査区域外へ延びているため, 東西軸は4.00mで, 南北軸は1.12mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で, 主軸方向はN-24°-Eと推測できる。壁は高さ35~55cmで, ほぼ直立している。

床 平坦で, 壁際と竈周辺を除き踏み固められている。確認できた壁下には, 壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで128cm, 燃烧部幅は52cmである。袖部は, 床面を5~10cm掘りくぼめた部分に粘土ブロックを主体とした第8・9層を積み上げて構築されている。火床部は床面から深さ6cmほど掘り込んだ箇所を利用しており, 火床面の赤変硬化は認められない。第5層は焼土粒子を多く含んでおり, 使用時に堆積した層である。煙道部は壁外に46cm掘り込まれ, 火床部から外傾している。第1層は天井部の崩落した層である。9は竈覆土下層を中心に出土した破片が接合したもので, 竈で使用した甕をそのまま遺棄したものと考えられる。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 焼土粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量 | 6 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 7 暗褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子・粘土粒子少量 | 8 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量 |
| | 9 暗褐色 ロームブロック中量, 粘土ブロック・炭化粒子少量 |

ピット P1は深さ57cmで, 規模と配置から支柱穴である。第1・2層は柱抜き取り後の堆積土で, 第3・4層は埋土である。

ピット土層解説

- | | |
|----------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム粒子多量 |

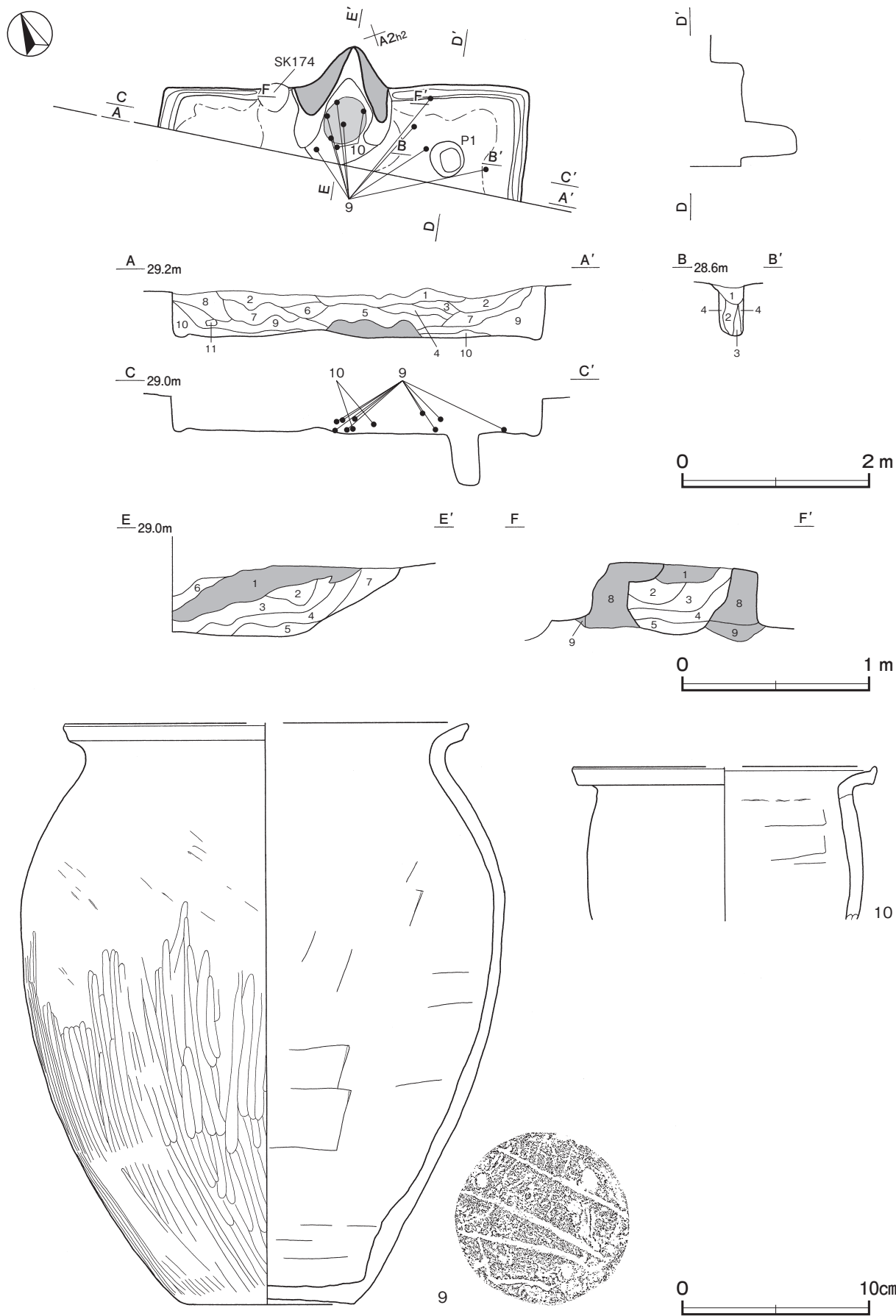
覆土 11層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ, 不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子多量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量 | 8 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量 | 9 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック中量 | 10 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子多量, 粘土ブロック少量 | 11 灰白色 灰白色砂多量 |
| 6 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 土師器片29点(甕類), 須恵器片13点(坏類9, 盤4)のほか, 縄文土器片1点(深鉢), 粘土塊1点, 軽石1点, 自然礫4点が, 竈覆土下層を中心に全域から散在した状態で出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第7図 第4号竖穴建物跡・出土遺物実測図

第4号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
9	土師器	甕	[21.6]	31.4	9.5	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁～頸部横ナデ 体部外面縦位のヘラ磨き 内面ヘラナデ	竈覆土下層 覆土上層～床面	60% PL 6
10	土師器	甕	[16.2]	(8.3)	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	橙	普通	口縁～頸部横ナデ 体部内面ヘラナデ 輪積痕	竈覆土下層	10%

第5号竖穴建物跡 (第8・9図)

位置 調査区東部のA2f5区, 標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号竖穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 北側が攪乱を受けているため, 東西軸は3.24mで, 南北軸は2.36mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形で, 主軸方向はN-12°-Eと推測できる。壁は高さ22~38cmで, 直立している。

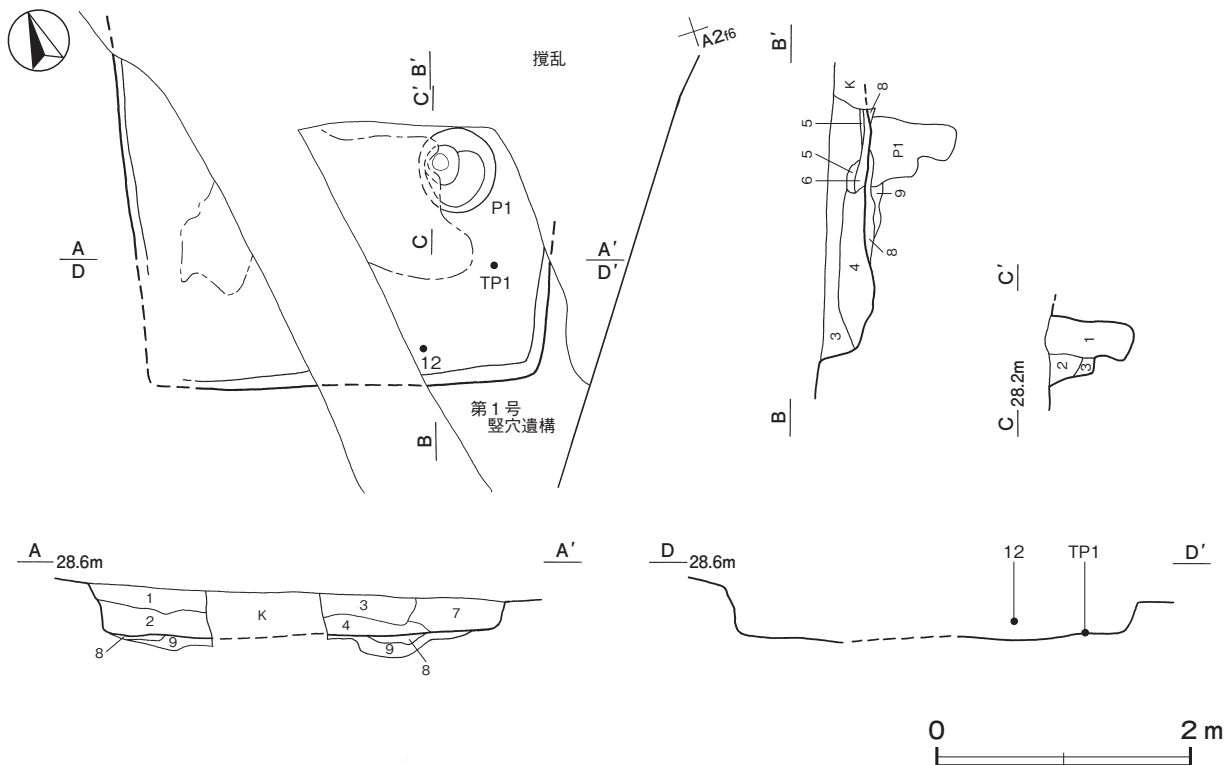
床 平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床は最大で深さ18cmの土坑状の掘り込みに, 黒褐色土を主体とする第9層を埋土し, その上に, ロームブロックを主体とする第8層を貼って構築されている。第8層は, P1の掘方埋土上にあることから, 柱の設置後に貼床の構築を完了させている。

ピット P1は深さ73cmで, 規模から支柱穴である。第1層は柱抜き取り後の堆積土で, 第2・3層は埋土である。

ピット土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量

覆土 7層に分層できる。多くの層に焼土粒子や炭化粒子が含まれ, 不規則な堆積状況を示していることから, 埋め戻されている。第5・6層は粘土粒子が含まれており, 締まりの非常に強い版築状の層で, P1の上部にのみ確認できることから, 柱を固定するために構築された可能性がある。第8・9層は貼床の構築土である。



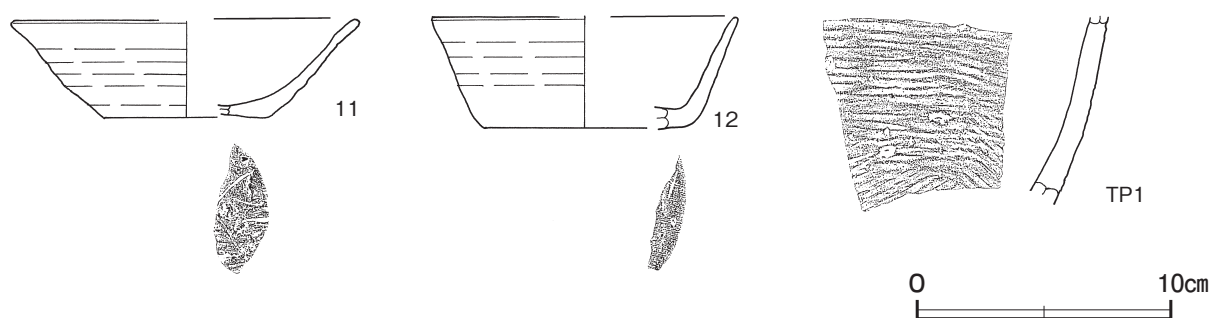
第8図 第5号竖穴建物跡実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量 | 8 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量, ロームブロック少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 粘土粒子多量, 焼土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 215 点 (坏類 12, 甕類 203), 須恵器片 142 点 (坏類 94, 高台付坏 1, 蓋 5, 盤類 4, 壺 2, 瓶類 7, 甕類 24, 甌 5), 泥岩片 12 点のほか, 縄文土器片 2 点 (深鉢), 土師質土器片 3 点 (鉢類), 陶器片 2 点 (挿鉢, 鉢類), 磁器片 1 点 (碗), 石器 4 点 (砥石) が, 全域から散在した状態で出土している。11 は後世に混入したものである。12・TP 1 は覆土下層から床面にかけての出土で, 埋め戻しの際に混入したものである。泥岩は, 被熱していることから竈に利用された切石の碎片の可能性はある。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀前葉に比定できる。



第9図 第5号竪穴建物跡出土遺物実測図

第5号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	須恵器	坏	[13.4]	3.9	[6.6]	長石・石英・針状物質	灰	普通	底面ナデ ヘラ記号	覆土中	20% 木葉下窯産
12	須恵器	坏	[12.0]	4.4	[7.8]	長石・石英・針状物質	灰黄	普通	底部ヘラ削り	覆土下層	10% 木葉下窯産
番号	種別	器種	胎土		色調	文様の特徴ほか			出土位置	備考	
TP 1	須恵器	甕	長石・石英・針状物質・礫		灰赤	体部外面横位・斜位の平行叩き			床面	木葉下窯産	

第6号竪穴建物跡 (第10図)

位置 調査区北部のA 2 e4 区, 標高 28 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 攪乱を受けている範囲が多く, 東西軸 3.07 m, 南北軸 1.26 m しか確認できなかった。平面形は長方形で, 主軸方向は N - 62° - W と推測できる。壁は高さ 22cm で, ほぼ直立している。

床 平坦で, 竈の前面が踏み固められている。

竈 西壁に付設されている。遺存状態が悪く, 袖部は基部の痕跡しか確認できなかった。火床部から煙道部が攪乱を受けており, 規模は燃焼部幅は 45cm で, 焚口部から燃焼部までは 48cm しか確認できなかった。火床部は床面から 10cm 掘り込んだ箇所を利用しており, 火床面は火熱を受けて赤変硬化している。一面が被熱している泥岩の切石が覆土下層から出土しており, 袖の補強材として使用されたものと考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 2 褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量 |
|-------|--------------|------|------------------------|

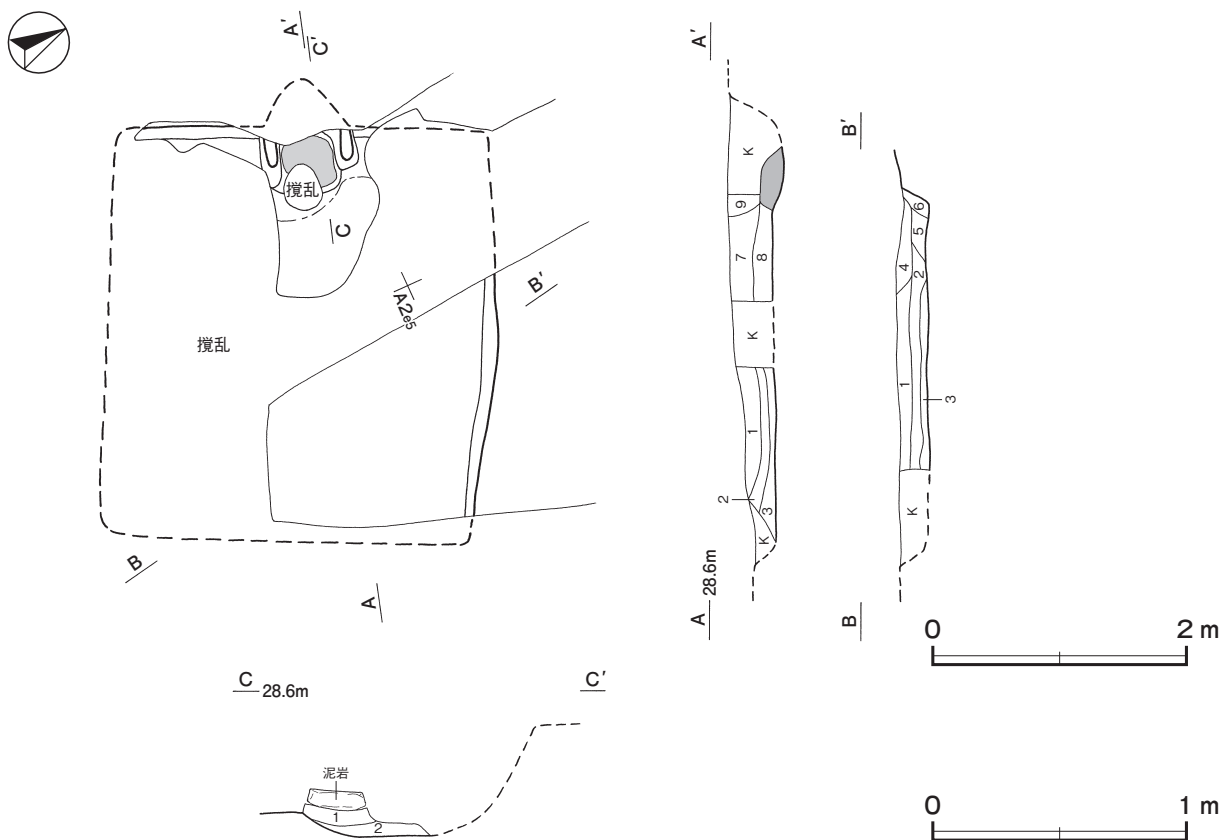
覆土 9層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片8点(甕7, 甑1), 泥岩5点が, 覆土中から出土している。土器は細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土遺物から判断することは難しいが, 形状から判断して, 他の竪穴建物跡と同じ奈良・平安時代と考えられる。



第10図 第6号竪穴建物跡実測図

第7号竪穴建物跡 (第11～13図)

位置 調査区中央部のA2e4区, 標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第179・181・188・192・202・211・221号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.65m, 短軸3.40mの方形で, 主軸方向はN-24°-Eである。壁は高さ53～56cmで, 直立している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。北壁を除いて, 壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。遺存状態が悪く, 袖部は基部の痕跡しか確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで98cm, 燃焼部幅は53cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめており, 火床面の赤変

硬化は認められない。煙道部は壁外に67cm掘り込まれ、火床部から外傾している。火床部と焚口部付近の覆土下層中に泥岩の切石が散在しており、構築材が崩落したものと考えられる。

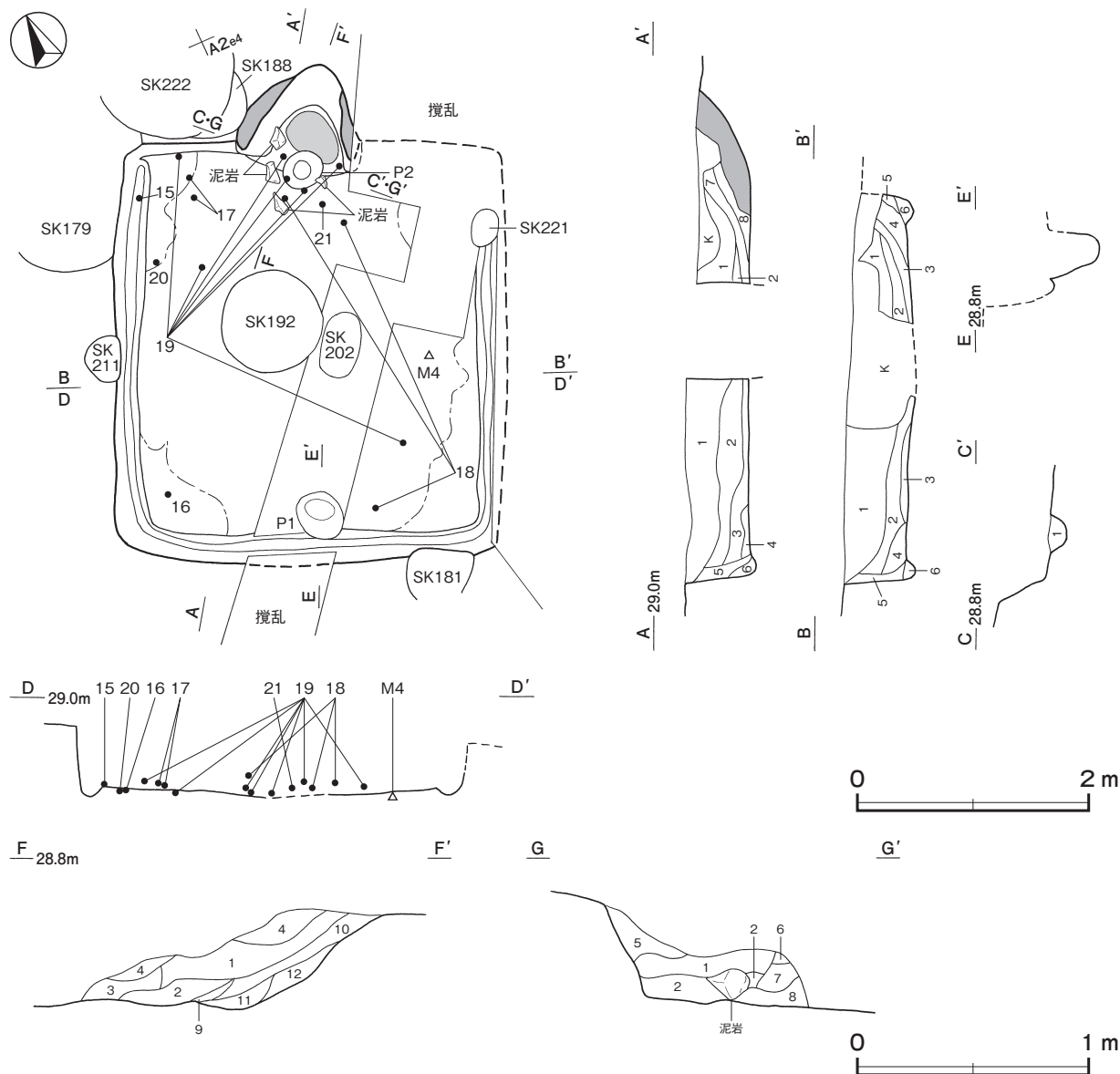
竈土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子多量, 粘土粒子中量, 炭化粒子少量 | 7 暗褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土粒子少量 | 8 黒褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 9 灰黄褐色 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 10 におい褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 5 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 11 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土ブロック中量 |
| 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 12 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |

ピット 2か所。P1は深さ46cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。壁溝にかかるような形状から、南側に向かって柱を抜き取ったと考えられる。P2は深さ17cmで、竈火床部の手前に位置し、焼土粒子や炭化粒子を多く含んでいることから、灰などをかき出すために掘られたものと考えられる。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子多量



第11図 第7号竈穴建物跡実測図

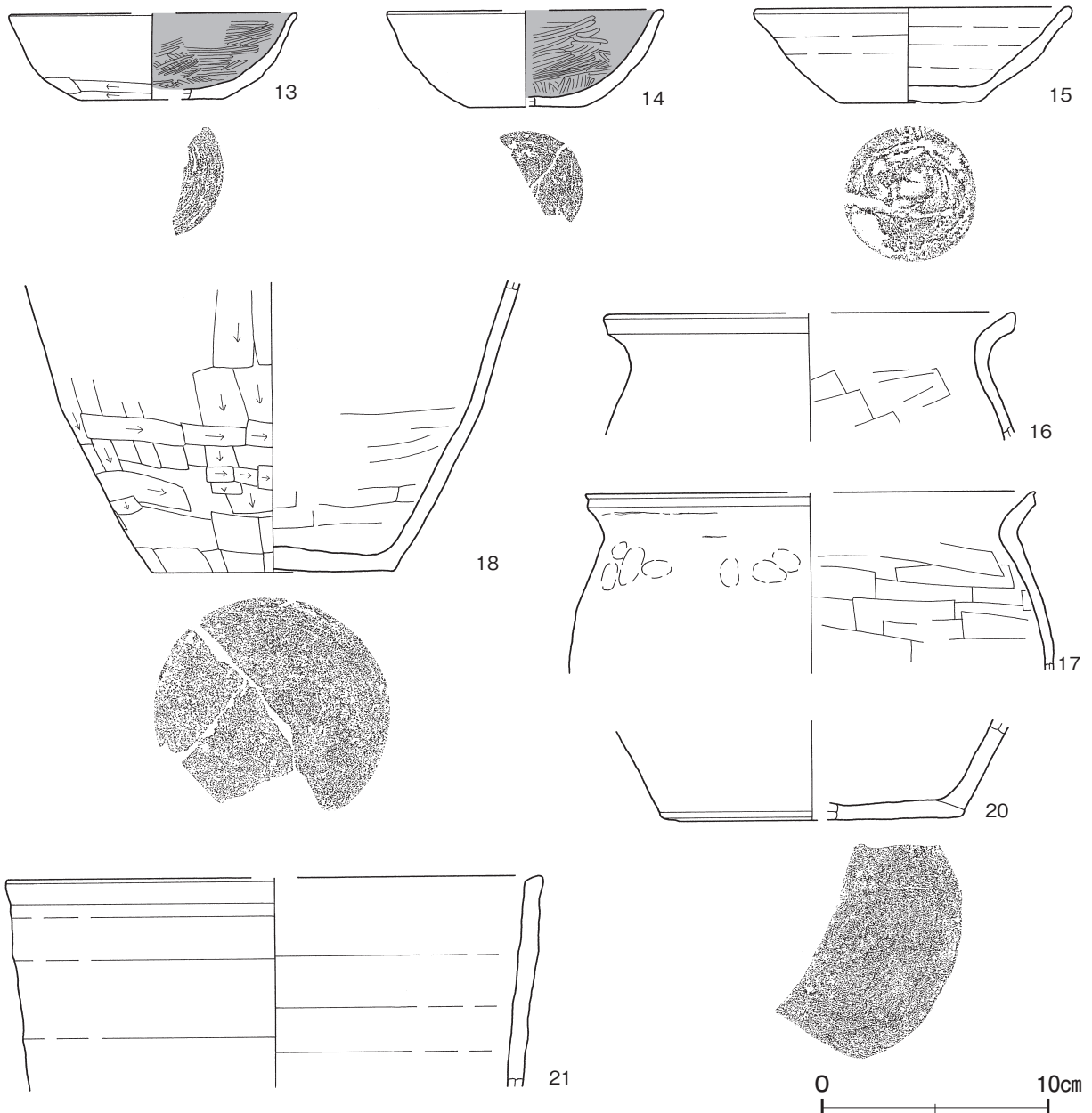
覆土 8層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

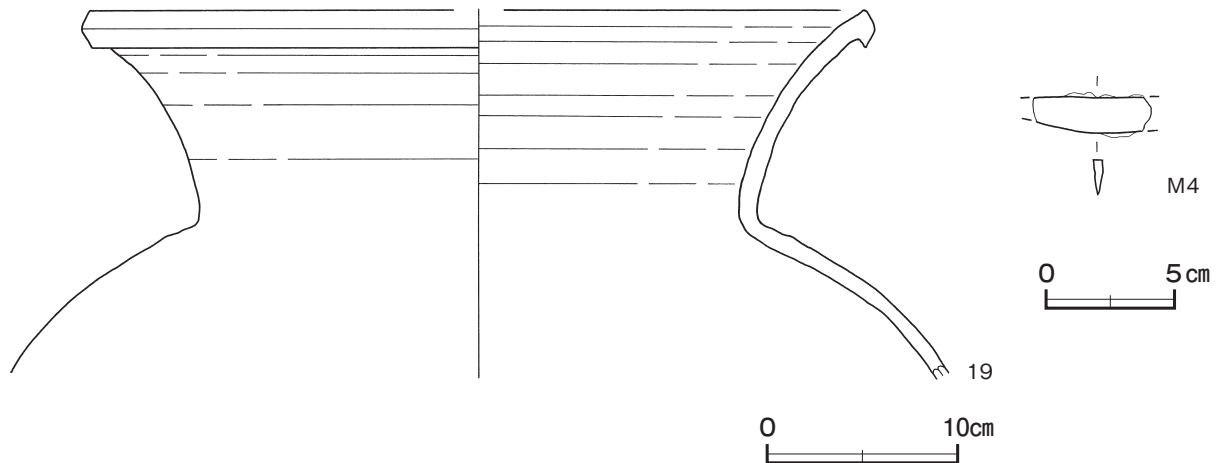
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子中量, 粘土ブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |
| 5 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片 527 点 (坏類 116, 高台付坏 9, 椀 1, 鉢 4, 甕類 397), 須恵器片 110 点 (坏類 50, 高台付坏 1, 壺 7, 瓶類 1, 甕類 47, 甗 4), 灰釉陶器片 1 点 (瓶類), 金属製品 1 点 (刀子), 泥岩 6 点, 瑪瑙 1 点のほか, 土師質土器片 1 点 (焙烙), 陶器片 2 点 (皿, 壺), 磁器片 5 点 (碗), 石器 1 点 (砥石), 自然礫 5 点, 北部を中心に全域から散在した状態で出土している。15～21・M 4 は破片で覆土中層から床面にかけて出土したもので, 埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 12 図 第 7 号 竪穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第13図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表(第12・13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
13	土師器	坏	[12.8]	3.8	[6.4]	長石・石英・針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 体部外面下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中	30%
14	土師器	坏	[12.2]	4.3	[5.2]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面ヘラ磨き 底部多方向の削り	竈覆土中	20%
15	須恵器	坏	14.0	4.3	6.2	長石・石英・角閃石・針状物質	灰黄	不良	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ	床面 覆土中	80% PL 5 木葉下窯産
16	土師器	甕	[18.0]	(5.8)	-	長石・石英・角閃石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁～頸部横ナデ 体部内面ヘラナデ	床面	5%
17	土師器	甕	[20.0]	(8.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁～頸部横ナデ 体部内面ヘラナデ 指頭痕 輪積痕	覆土下層	10%
18	土師器	甕	-	(12.9)	10.8	長石・石英・針状物質・赤色粒子	橙	普通	体部外面中位縦位・下端部横位ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層～ 下層	30%
19	須恵器	甕	[41.0]	(19.5)	-	長石・石英・礫	暗灰	良好	頸部外面横ナデ 内面ロクロナデ	覆土下層 竈覆土中	10% PL 5 木葉下窯産
20	須恵器	甕	-	(4.5)	[13.2]	長石・石英・礫	灰	普通	底部接合痕を沈線状に残す	床面	5% 木葉下窯産
21	須恵器	甕	[23.6]	(9.4)	-	長石・石英・針状物質・赤色粒子	明褐	不良	体部外面横ナデ	覆土下層	5% 木葉下窯産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	刀子	(4.7)	(1.4)	0.4	(7.5)	鉄	刃部・茎部欠損 刃部断面三角形	床面	PL 6

第8号竪穴建物跡(第14・15図)

位置 調査区中央部のA 2g3区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第9号竪穴建物跡を掘り込み、第193・195～198・210号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.32m、短軸3.78mの長方形で、主軸方向はN-26°-Eである。壁は高さ36～40cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。攪乱を受けており、袖部は基部の痕跡しか確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで105cm、燃焼部幅は58cmである。火床部は床面を8cmほど掘り込んだ箇所を利用しており、火床面は赤変硬化している。煙道部は壁外に57cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第1・2層は天井部が崩落した層で、火床面との間にほとんど堆積した層がないことから、廃絶後間もなく崩落したものと考えられる。

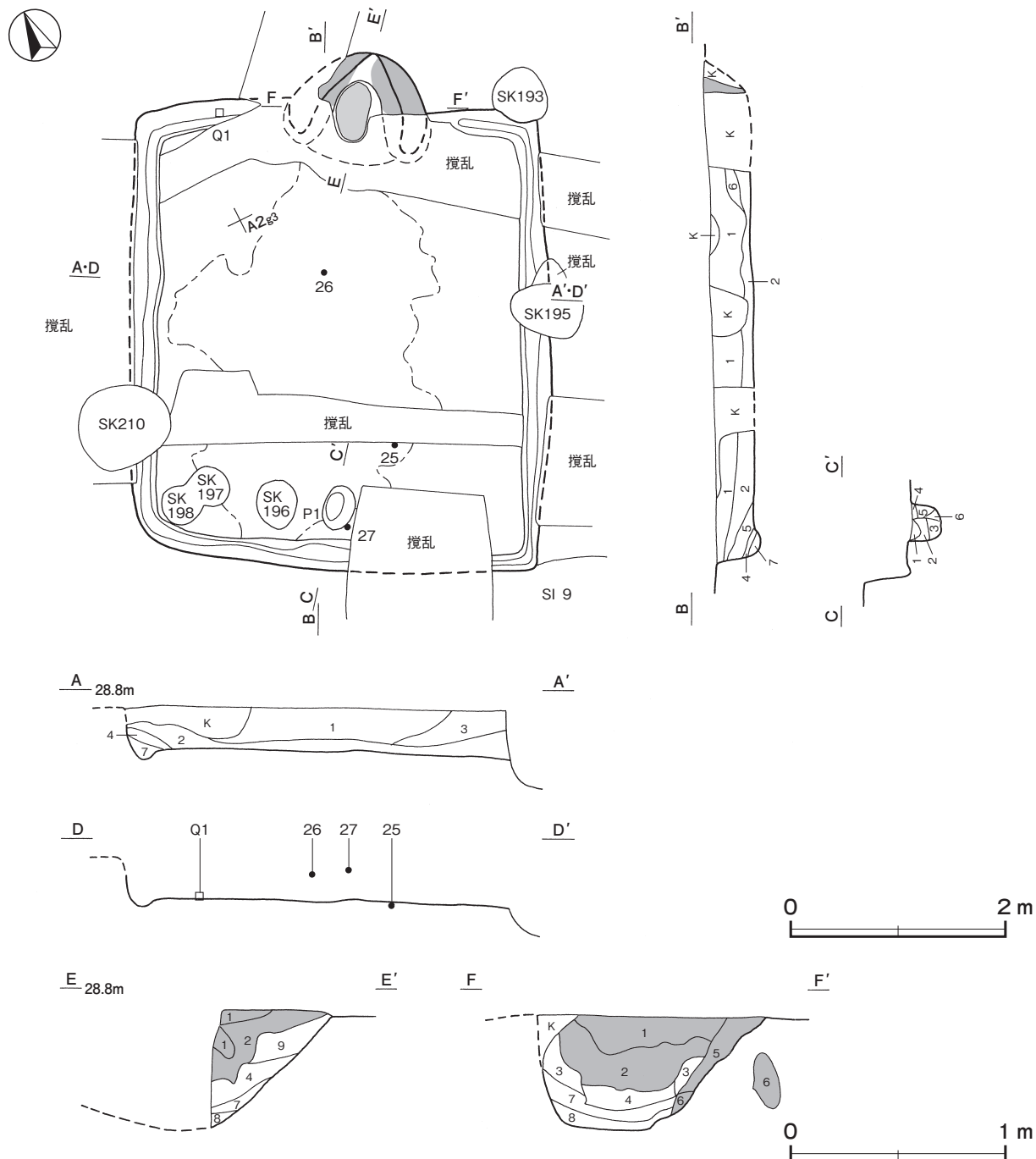
竈土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------|----------|----------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土ブロック・焼土粒子多量, 炭化粒子少量 | 6 にぶい黄橙色 | 粘土ブロック多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄橙色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 灰黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子多量, 炭化粒子少量 |
| 3 明褐色 | 焼土ブロック多量, 粘土ブロック中量, 炭化粒子微量 | 8 褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子・粘土粒子少量 | 9 にぶい黄橙色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 粘土粒子多量, 焼土ブロック中量, 炭化粒子微量 | | |

ピット P1は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。第1～3層は柱抜き取り後の堆積土で、第4～6層は埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |



第14図 第8号竪穴建物跡実測図

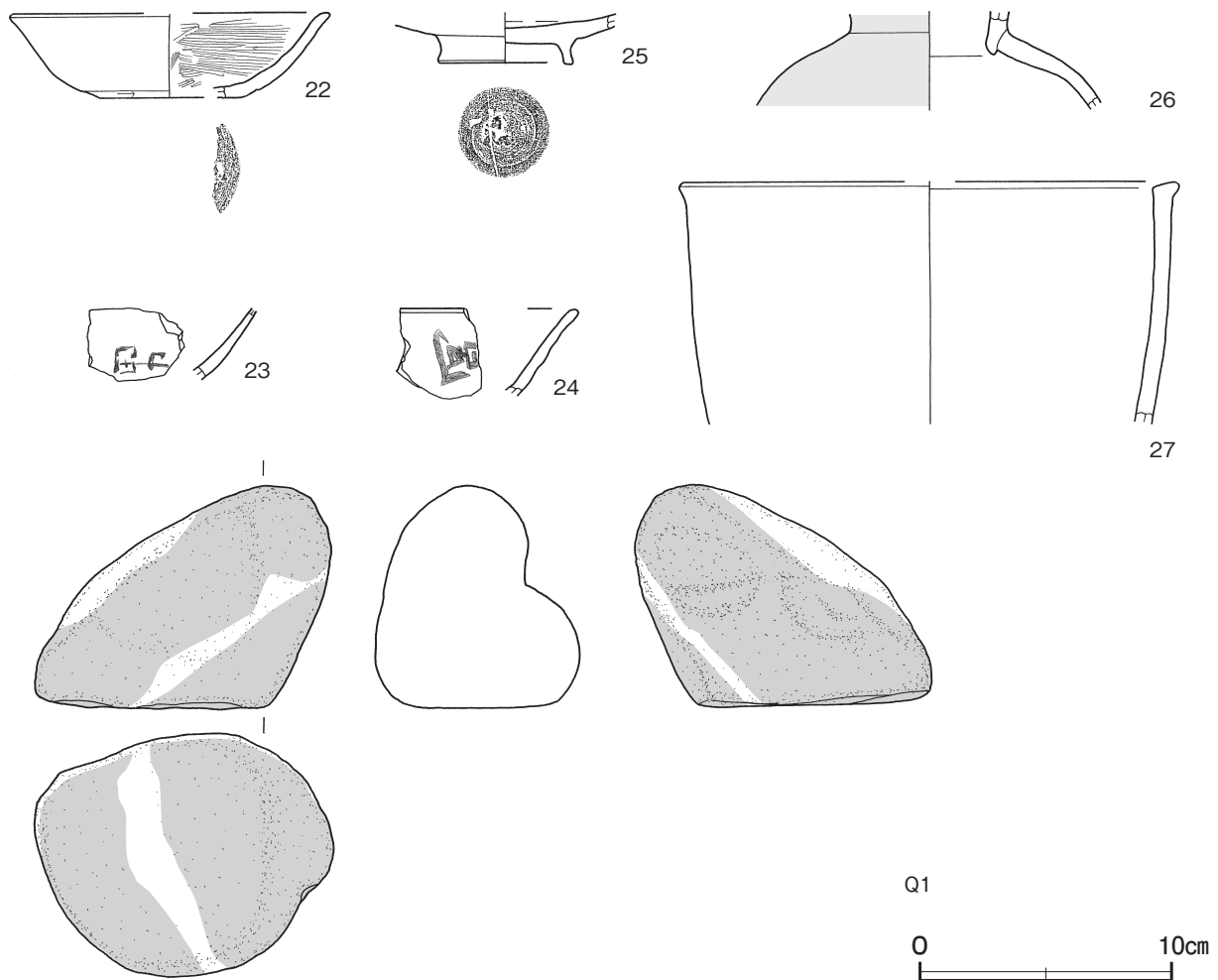
覆土 7層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 337 点 (坏類 87, 高台付坏 8, 甕類 242), 須恵器片 77 点 (坏類 42, 高台付坏 2, 蓋 1, 壺類 15, 瓶類 5, 甕 5, 甌 7), 灰釉陶器片 2 点 (瓶類), 石器 1 点 (台石), 泥岩 5 点のほか, 土師質土器片 1 点 (小皿), 陶器片 3 点 (播鉢 1, 鉢類 2), 磁器片 1 点 (碗), 石器 1 点 (火打石), 不明鉄製品 1 点, 粘土塊 2 点, 自然礫 6 点が, 全域から散在した状況で出土している。25 は床面から出土しており, 廃絶時に遺棄されたか廃絶後間もなく投棄されたものである。26・27 は覆土上層から出土しており, 埋め戻す過程で投棄されたか混入したものと考えられる。Q 1 は北西コーナーの壁溝覆土上層から出土していることから, 廃絶時に遺棄されたものである。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 15 図 第 8 号 縦穴建物跡出土遺物実測図

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
22	土師器	坏	[12.3]	3.4	[5.4]	長石・石英・針状物質・赤色粒子	橙	普通	内面へラ磨き 体部外面下端回転へラ削り	覆土中	10%
23	土師器	坏	-	(2.9)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面へラ磨き 体部外面墨書「□部」	覆土中	5% PL 6
24	土師器	坏	-	(3.5)	-	長石・石英・針状物質	灰黄	普通	体部外面墨書「富」	覆土中	5% PL 6
25	須恵器	高台付坏	-	(2.0)	5.4	長石・石英・針状物質・礫	灰	普通	底部回転へラ削り	床面	20% 木葉下窯産
26	灰釉陶器	長頸瓶	-	(4.0)	-	長石・黒色粒子	灰オリーブ	緻密	二段接合 外面施釉	覆土上層	5% PL 6 猿投窯産
27	須恵器	甌	[19.6]	(9.7)	-	長石・石英・針状物質	灰黄褐	普通	体部外面横ナデ	覆土上層	5% 木葉下窯産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	台石	8.9	11.9	9.7	1255.3	安山岩	被熱して赤化・発泡	壁溝覆土上層	PL 8

第9号竪穴建物跡（第16図）

位置 調査区南部のA 2h3区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第8・10号竪穴建物、第189・216号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第10号竪穴建物に掘り込まれているため、東西軸は2.91mで、南北軸は2.23mしか確認できなかった。平面形は方形と推測でき、主軸方向はN-63°-Wである。壁は高さ16~18cmで、外傾している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 西壁に付設されている。遺存状態が悪く、袖部は痕跡しか確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで98cm、燃焼部幅は38cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さを利用しており、火床面の赤変硬化は認められない。煙道部は壁外に24cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第5層は天井部が崩落した層である。覆土下層から土製支脚が破片の状態出土している。

竈土層解説

1	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量	6	黒褐色	炭化粒子多量、焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子中量	7	褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子中量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量	8	暗褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
4	黒褐色	炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	9	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
5	灰黄褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量	10	黒色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ロームブロック・粘土粒子少量

ピット P1は深さ57cmで、規模と配置から主柱穴である。第1層は柱抜き取り後の堆積土で、第2層は埋土である。

ピット土層解説

1	黒褐色	炭化粒子中量、ロームブロック少量	2	褐色	ロームブロック多量
---	-----	------------------	---	----	-----------

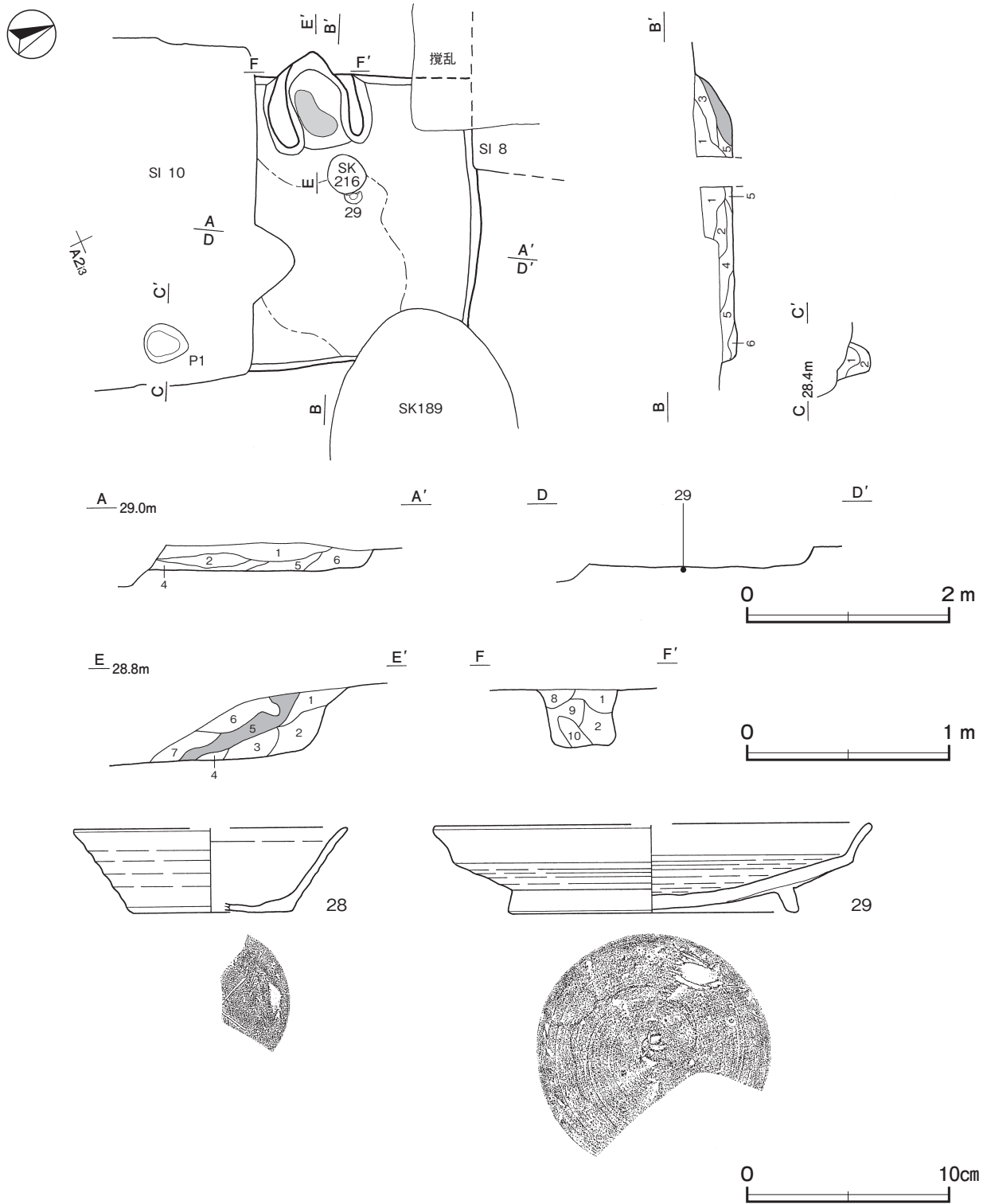
覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	ロームブロック中量	4	黒褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ロームブロック多量	5	灰黄褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	6	黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片11点（坏類2、甕類9）、須恵器片16点（坏類12、蓋1、盤2、横瓶1）、土製品1点（支脚）、泥岩1点が、西部を中心に全域から出土している。29は床面に遺棄されたものが、第216号土坑に掘り込まれた際に一部破壊されている。泥岩は、被熱していることから竈に利用された切石の碎片の可能性はある。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第 16 図 第 9 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 9 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 16 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
28	須恵器	坏	[13.4]	4.2	[8.0]	長石・石英・針状物質	灰	普通	体部外面下端ヘラナデ 底部外面ヘラナデヘラ記号	覆土中	20% 木葉下窯産
29	須恵器	盤	[21.6]	4.4	14.3	長石・石英・礫・黑色粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	床面	50% PL 5 木葉下窯産

第 10 号 竪穴建物跡 (第 17・18 図)

位置 調査区南部の A 2h3 区, 標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 9 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 201・213・215 号土坑に掘り込まれている。

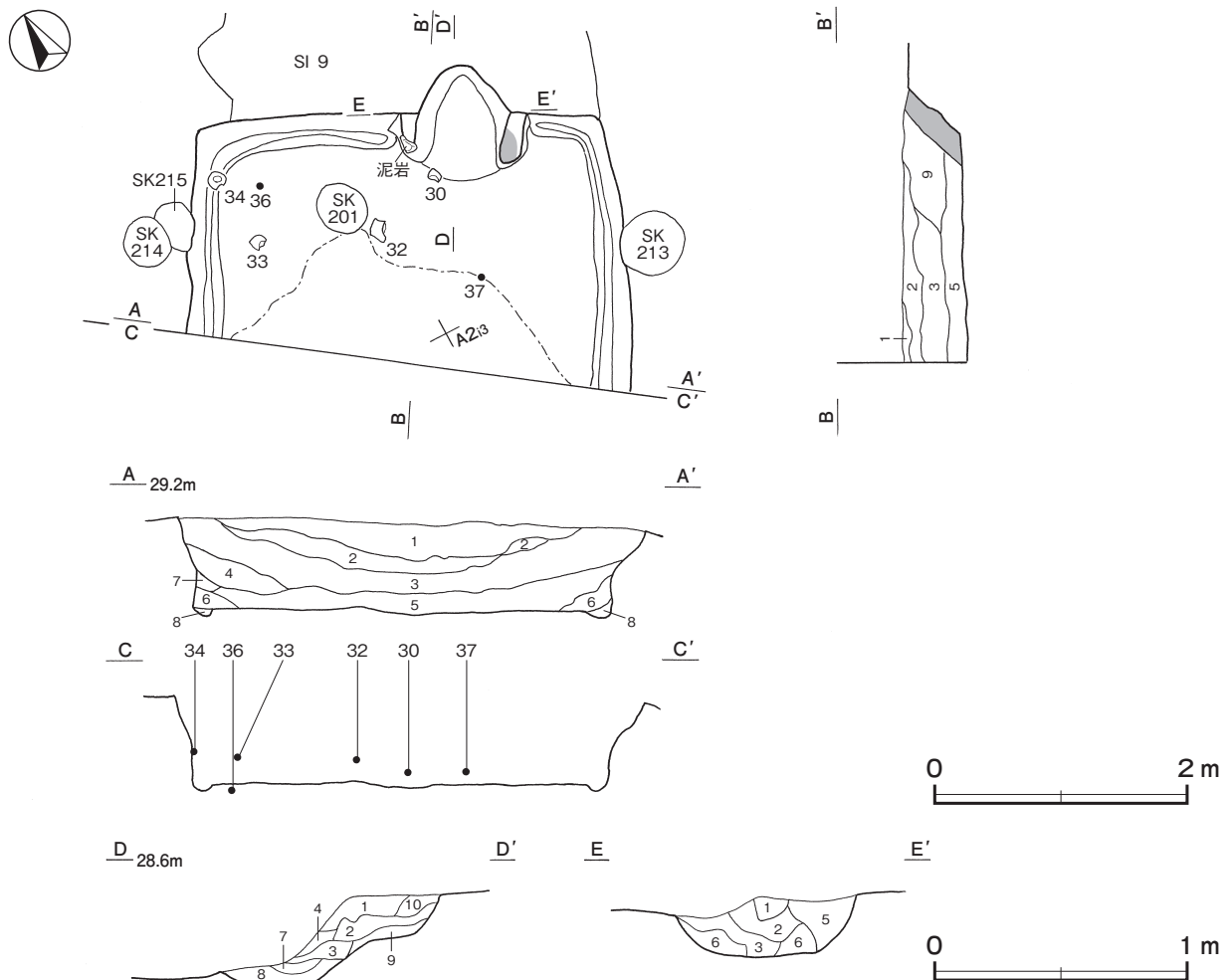
規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため, 東西軸は 3.53 m で, 南北軸は 2.18 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で, 主軸方向は N - 29° - E と推測できる。壁は高さ 46 ~ 58 cm で, 下位は直立し, 上位で外傾している。

床 平坦で, 中央部が踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。

竈 北壁の東寄りに付設されている。遺存状態が悪く, 袖部は痕跡しか確認できなかった。規模は焚口部から煙道部まで 92 cm, 燃焼部幅は 47 cm である。火床部は床面とほぼ同じ高さを利用しており, 火床面の赤変硬化は認められない。煙道部は壁外に 38 cm 掘り込まれ, 火床部から外傾している。左袖付近から一面が被熱している泥岩の切石が出土しており, 袖の補強材として使用されたものと考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子中量, 焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子・粘土粒子少量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量, 粘土粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子少量 | 8 灰褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量, 粘土ブロック・焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 9 黒褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック少量 |
| 5 黒褐色 | 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 10 黒褐色 | 炭化粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |



第 17 図 第 10 号竪穴建物跡実測図

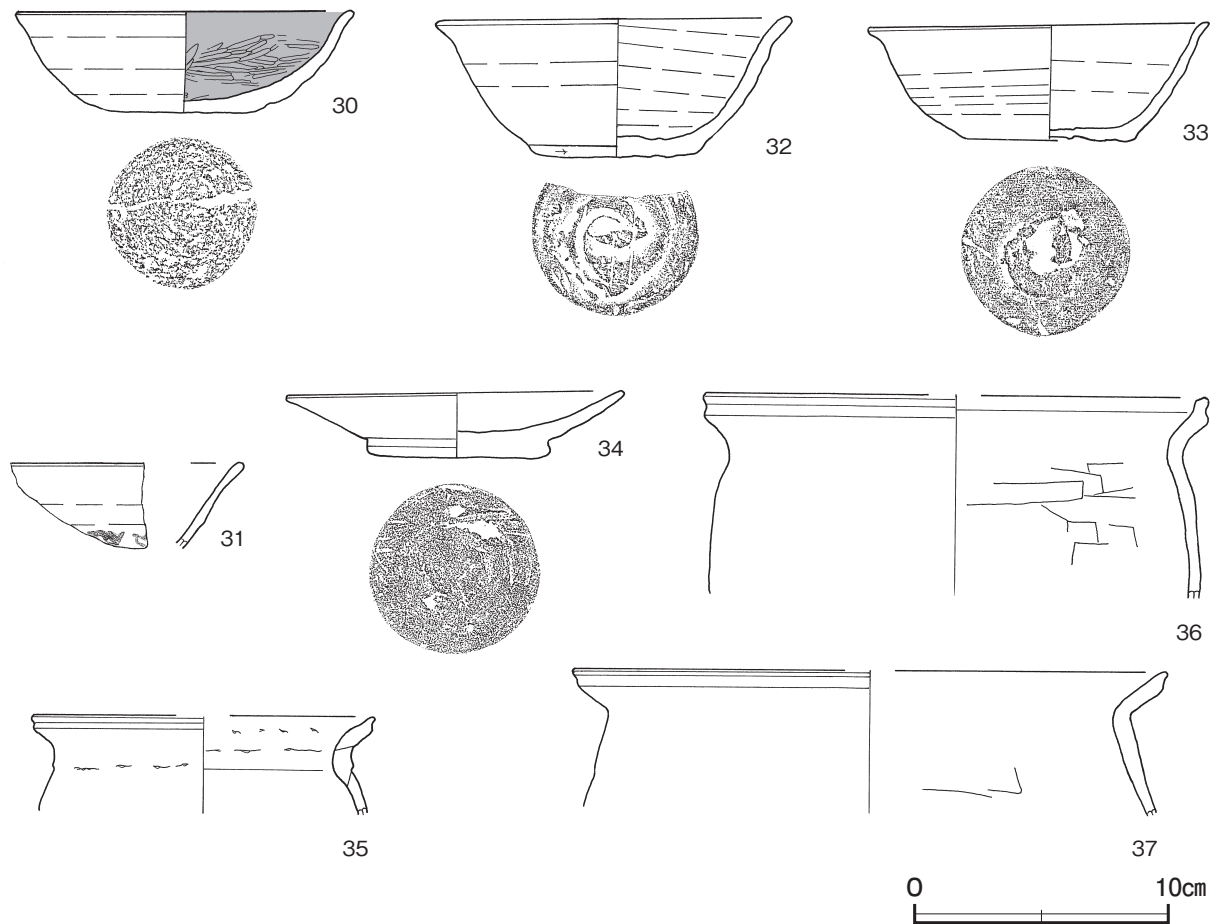
覆土 9層に分層できる。周囲から流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | | |
| 6 黒褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 318点 (坏類 27, 甕類 291), 須恵器片 127点 (坏類 78, 高台付坏 1, 皿 1, 盤類 5, 瓶類 37, 甕 3, 甗 2), 泥岩 1点のほか, 縄文土器片 2点 (深鉢), 不明鉄製品 2点, 粘土塊 1点, 自然礫 5点が, 全域から出土している。30・32～34・37は覆土下層から出土したもので, 埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第 18 図 第 10 号 竪穴建物跡出土遺物実測図

第 10 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 18 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
30	土師器	坏	13.2	4.1	6.0	長石・石英・針状物質・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部外面ナデ 内面ヘラ磨き	覆土下層	80% PL 6
31	土師器	坏	-	(34)	-	長石・石英・角閃石	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き 体部外面墨書「□□」	覆土中	5% PL 6
32	須恵器	坏	13.7	5.7	6.5	長石・石英・角閃石・針状物質・礫	にぶい黄橙	不良	体部外面下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切りヘラ記号	覆土下層	70% PL 5 木葉下窯産
33	須恵器	坏	13.4	4.8	6.7	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すナデ	覆土下層	60% PL 5 県南部産カ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	須恵器	皿	13.2	2.7	7.0	長石・石英・針状物質・黒色粒子	にぶい黄褐	不良	底部回転ヘラ切り痕を残す多方向のヘラ削り	覆土下層	95% PL 5 木葉下窯産
35	土師器	甕	[13.4]	(3.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁～頸部輪積痕を残す横ナデ	覆土中	10%
36	土師器	甕	[19.8]	(8.0)	-	長石・石英・角閃石・針状物質・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁～頸部外面横ナデ 体部内面ヘラナデ	床面	10%
37	土師器	甕	[23.4]	(5.8)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁～頸部横ナデ 体部内面ヘラナデ	覆土下層	5%

第 11 号竪穴建物跡 (第 19・20 図)

位置 調査区北部の A 2 d5 区, 標高 28 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 1 号整地跡に伴う掘り込みに壊されている。

規模と形状 西側は攪乱を受け, 他の大部分が第 1 号整地跡に伴う掘り込みに壊されているため, 南北軸 1.92 m, 東西軸 2.16 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形で, 主軸方向は N - 2° - W と推測できる。壁は高さ 44cm で, 直立している。

床 平坦な貼床で, P 1 と P 2 の間が踏み固められている。貼床は, 深さ 11 ~ 18cm の不整形な土坑状の掘り込みにロームブロックを含む第 5 層を埋めて構築されている。確認できた南壁下には壁溝が巡っている。

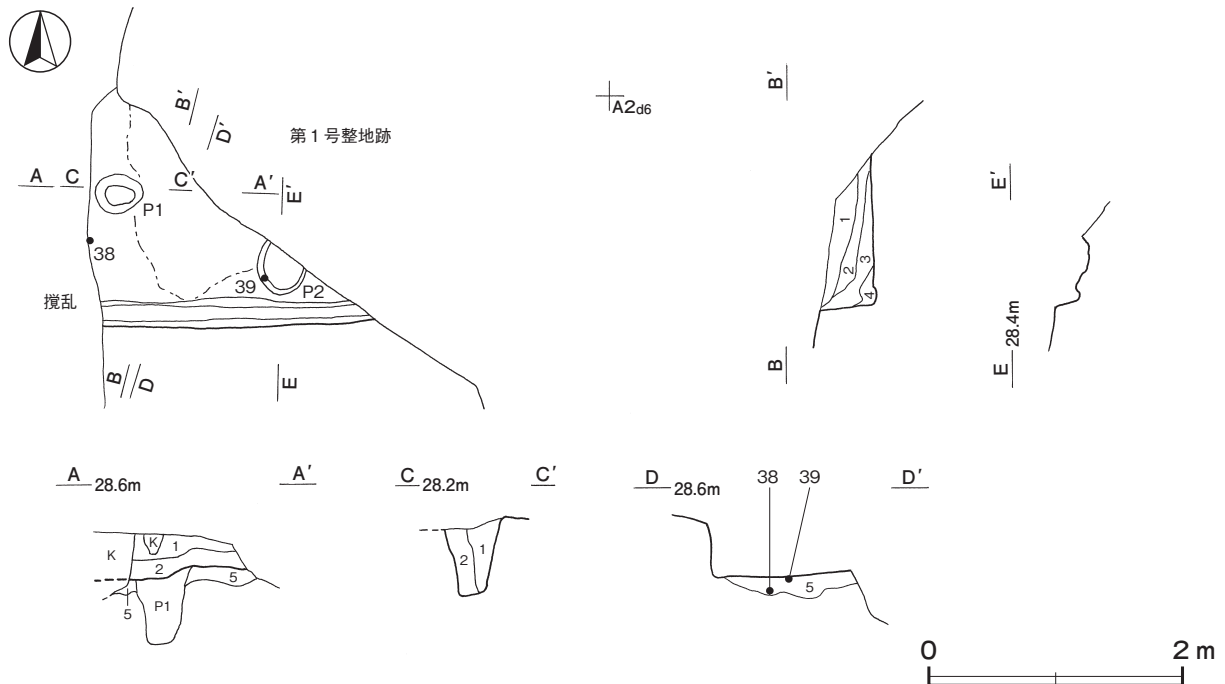
ピット 2 か所。P 1 は深さ 60cm で, 規模と堆積状況から主柱穴と考えられる。第 1 層は柱抜き取り後の堆積土で, 第 2 層は埋土である。P 2 は深さ 9cm で, 南壁際に位置していることから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量

2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量

覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。第 5 層は貼床の構築土である。



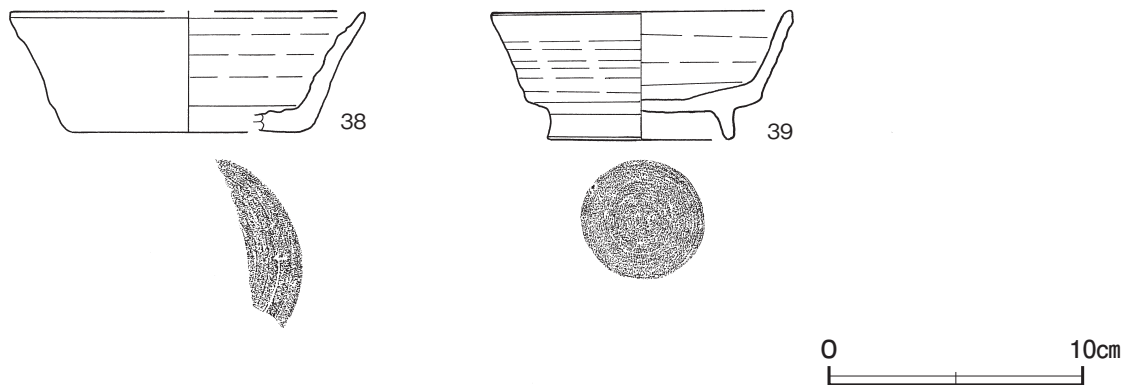
第 19 図 第 11 号竪穴建物跡実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
 2 黒褐色 炭化物少量, ロームブロック・焼土ブロック微量
 3 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック微量
 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
 5 褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子中量

遺物出土状況 土師器片 17 点 (甕類 16, 甌 1), 須恵器片 10 点 (坏類 8, 高台付坏 1, 甕 1) のほか, 陶器片 1 点 (鉢類) が, 覆土及び掘方埋土中から出土している。38 は掘方埋土下層からの出土で, 建物構築時に混入したものである。39 は床面から出土したもので, 建物廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 20 図 第 11 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 11 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 20 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
38	須恵器	坏	[14.0]	4.8	[9.0]	長石・石英・黒色粒子	褐灰	普通	底部回転ヘラ削り後, 外周ヘラナデ	掘方埋土下層	20% 木葉下窯産
39	須恵器	高台付坏	11.8	5.1	7.4	長石・石英・針状物質	灰	良好	底部回転ヘラ削り	床面	90% PL 5 木葉下窯産

表 2 奈良・平安時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(cm)				主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
2	A 2 f2	N - 7° - E	[長方形]	(5.30) × 5.11	27 ~ 58	平坦	[全周]	3	2	1	[北壁]	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 金属製品	9 世紀中葉	本跡 → SK205・209	
3	A 1 d5	N - 38° - E	[方形・長方形]	4.54 × (0.84)	16 ~ 38	平坦	-	1	-	-	-	-	人為	須恵器	8 ~ 9 世紀	本跡 → SK172	
4	A 2 h1	N - 24° - E	[方形・長方形]	4.00 × (1.12)	35 ~ 55	平坦	[全周]	1	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	8 世紀後葉	本跡 → SK174	
5	A 2 f5	N - 12° - E	[方形・長方形]	3.24 × (2.36)	22 ~ 38	平坦	-	1	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器, 泥岩	9 世紀前葉	第 1 号竪穴遺構 → 本跡	
6	A 2 e4	N - 62° - W	[長方形]	(3.07 × 1.26)	22	平坦	-	-	-	-	西壁	-	人為	土師器, 泥岩	8 ~ 9 世紀		
7	A 2 e4	N - 24° - E	方形	3.65 × 3.40	53 ~ 56	平坦	ほぼ全周	-	1	1	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 金属製品, 泥岩, 瑪瑙	9 世紀中葉	本跡 → SK179・181・188・192・202・211・221	
8	A 2 g3	N - 26° - E	長方形	4.32 × 3.78	36 ~ 40	平坦	[全周]	-	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 石器, 泥岩	9 世紀中葉	SI 9 → 本跡 → SK193・195 ~ 198・210	
9	A 2 h3	N - 63° - W	[方形]	2.91 × (2.23)	16 ~ 18	平坦	-	1	-	-	西壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品, 泥岩	8 世紀後葉	本跡 → SI 8・10, SK189・216	
10	A 2 h3	N - 29° - E	[方形・長方形]	3.53 × (2.18)	46 ~ 58	平坦	[全周]	-	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 泥岩	9 世紀中葉	SI 9 → 本跡 → SK201・213・215	
11	A 2 d5	N - 2° - W	[方形・長方形]	(2.16 × 1.92)	44	平坦	一部	1	1	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	8 世紀後葉	本跡 → 第 1 号整地跡	

(2) 竪穴遺構

第1号竪穴遺構 (第21図)

位置 調査区西部のA2f5区、標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第5号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部は調査区域外へ延び、北西側は第5号竪穴建物に掘り込まれており、北部と南西部は攪乱を受けているため、南北軸1.61m、東西軸1.14mしか確認できなかった。

床 平坦で、全体的に締まりは強いが踏み固められた部分はない。

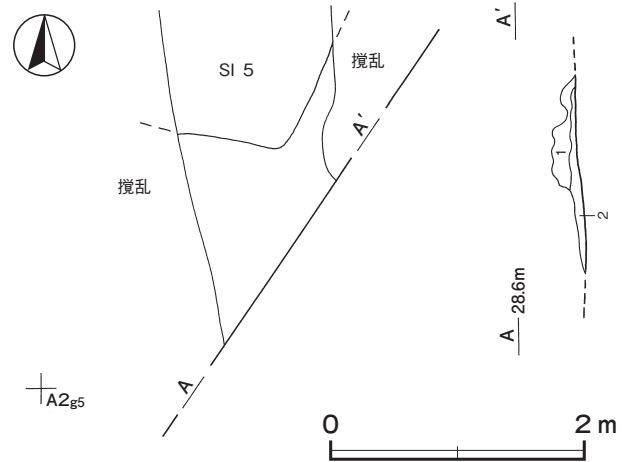
覆土 2層に分層できる。確認できた範囲が狭く、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)、須恵器片2点(坏)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、第5号竪穴建物に掘り込まれていることと出土遺物から、8世紀代と考えられる。床の硬化面は確認できなかったが、竪穴建物跡の可能性はある。



第21図 第1号竪穴遺構実測図

(3) 土坑

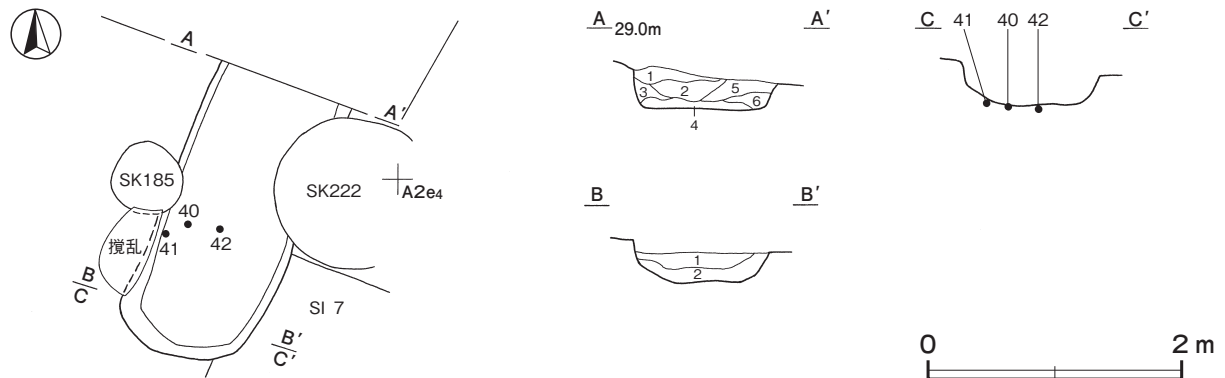
第179号土坑 (第22・23図)

位置 調査区中央部のA2e3区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第7号竪穴建物跡を掘り込み、第185・222号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、北西・南東軸は1.08mで、北東・南西軸は2.26mしか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推測でき、長軸方向はN-23°-Eである。深さは24cm、底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。多くの層にロームブロックを含む不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



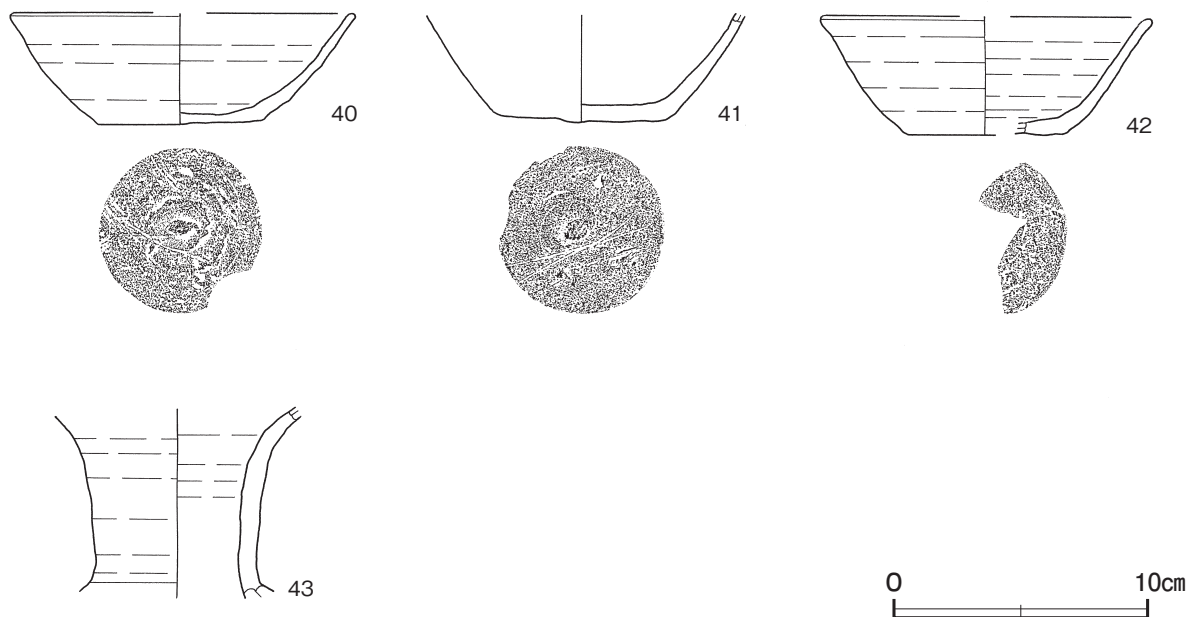
第22図 第179号土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 | 6 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 26 点 (坏類 9, 甕類 17), 須恵器片 27 点 (坏類 19, 蓋 4, 長頸瓶 1, 甕 3) が出土している。40～43 は底面及び覆土中から出土した破片が接合したもので, 埋没する過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 23 図 第 179 号土坑出土遺物実測図

第 179 号土坑出土遺物観察表 (第 23 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
40	須恵器	坏	[13.6]	4.4	6.5	長石・石英・角閃石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すヘラナデ ヘラ記号	底面	60% 木葉下窯産
41	須恵器	坏	-	(4.3)	6.8	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り痕を残すヘラナデ ヘラ記号	底面 覆土中	30% 木葉下窯産
42	須恵器	坏	[12.8]	4.7	[6.6]	長石・石英・針状物質	灰	普通	底部ヘラナデ	底面 覆土中	20% 木葉下窯産
43	須恵器	長頸瓶	-	(7.6)	-	長石・石英・礫・黒色粒子	灰黄	普通	頸部外・内面ロクロナデ	覆土中	10% PL 5 木葉下窯産

第 181 号土坑 (第 24 図)

位置 調査区中央部の A 2 f4 区, 標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 7 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 182 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 182 号土坑に掘り込まれているため, 短径は 0.55 m で, 長径は 0.68 m しか確認できなかった。楕円形と推定でき, 長径方向は N - 28° - E である。深さは 46cm, 底面は平坦で, 壁は外傾している。

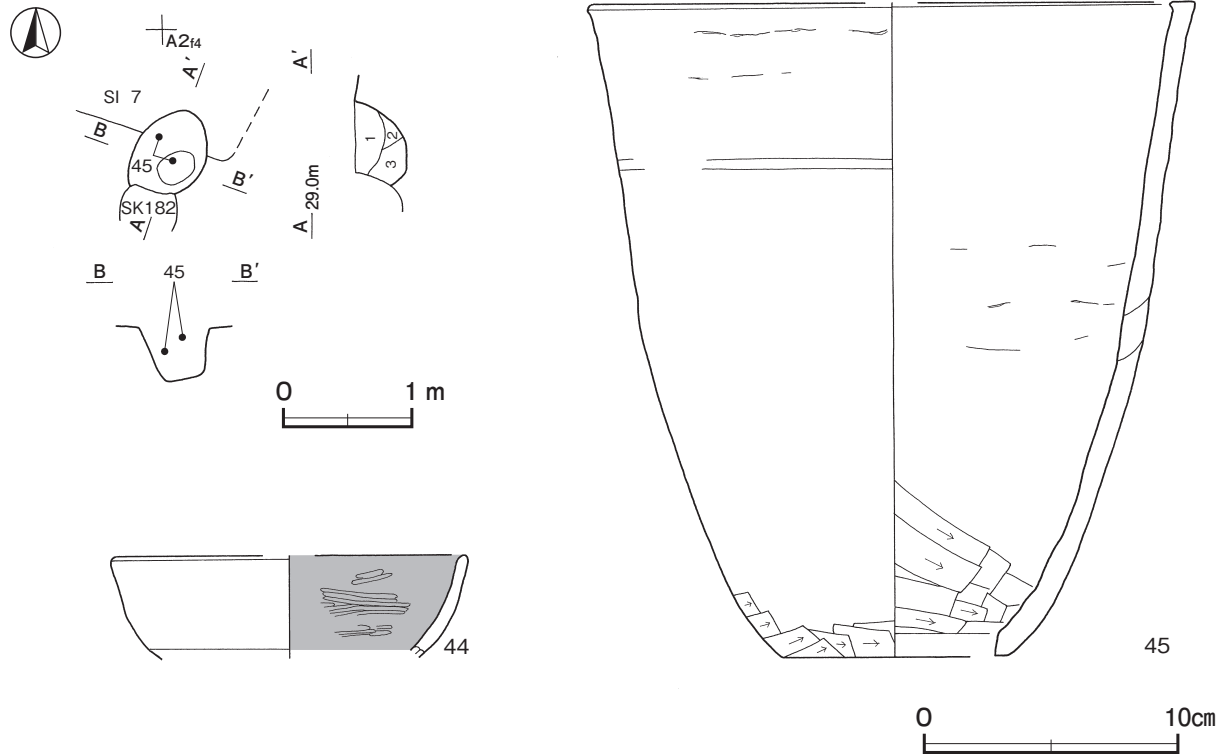
覆土 3 層に分層できる。各層にロームが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | | |

遺物出土状況 土師器片5点（坏1，甕類3，甗1），須恵器片2点（坏類）が出土している。45は覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したもので、埋め戻す際に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第24図 第181号土坑・出土遺物実測図

第181号土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
44	土師器	坏	[13.9]	(4.1)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	内面へラ磨き	覆土中	10%
45	土師器	甗	[24.0]	25.8	[9.0]	長石・石英・雲母・礫	灰黄	良好	口縁～頸部外・内面横ナデ 体部外・内面下位横位へラ削り 輪積痕	覆土上層～中層	30% PL 5

表3 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
179	A 2e3	N - 23° - E	[隅丸長方形]	(2.26) × 1.08	24	平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器	SI 7 → 本跡 → SK185・222
181	A 2f4	N - 28° - E	[楕円形]	(0.68) × 0.55	46	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI 7 → 本跡 → SK182

2 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、水路状施設1条，整地跡1か所，土坑2基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

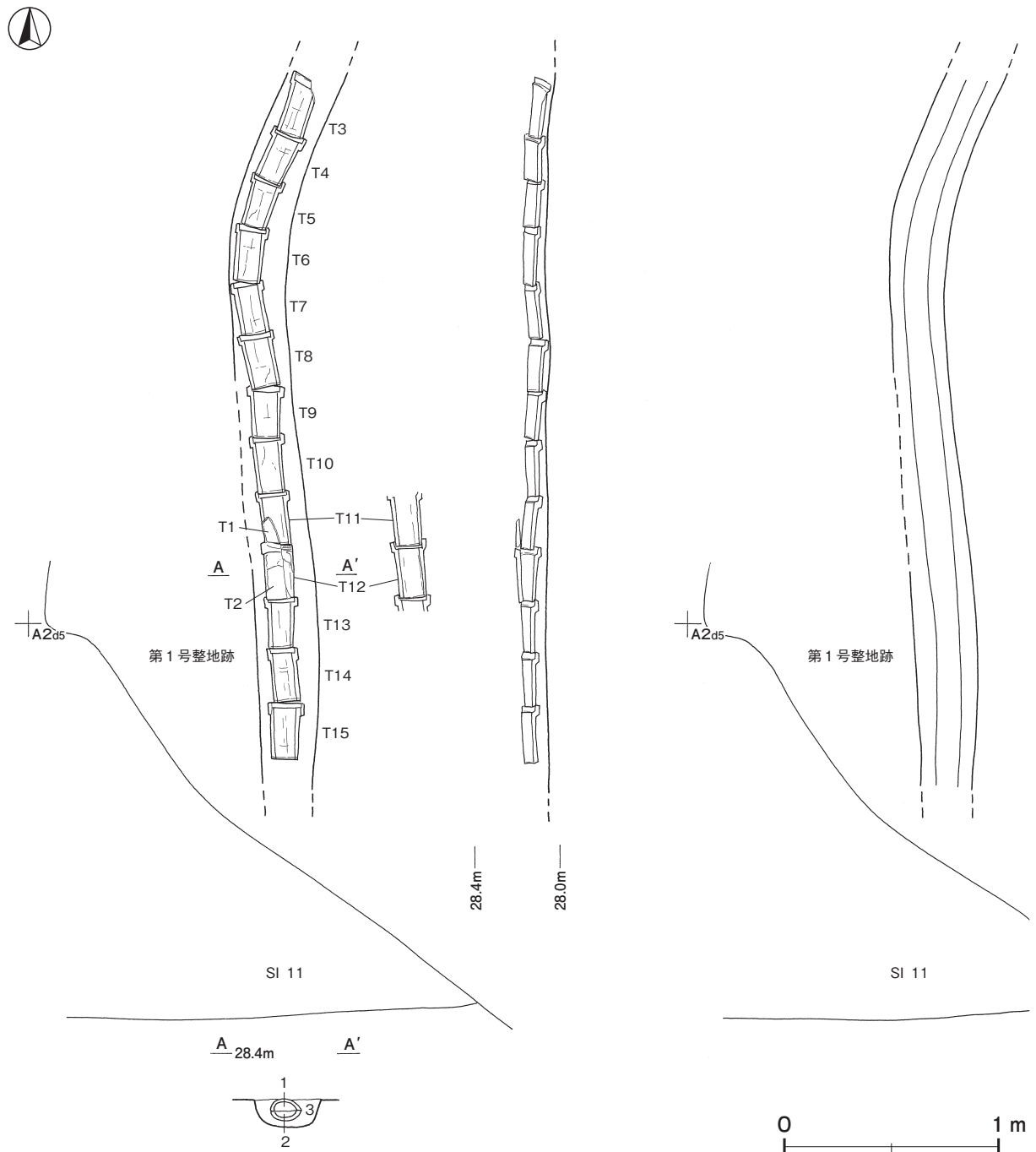
(1) 水路状施設

第1号水路状施設 (第25・26図)

位置 調査区北部のA2c5～A2d5区, 標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1号整地跡を掘り込んでいる。

規模と形状 攪乱を受けている範囲が多く, 長さは3.37mしか確認できなかった。A2d5区から北方向(N-4°-W)へ直線的に延び, A2c5区で北東方向(N-18°-E)へ緩やかに曲がっている。A2d5区より南側は第11号竪穴建物跡を掘り込んでいた可能性があるが, 削平されており確認できない。特殊瓦を上下に



第25図 第1号水路状施設実測図

組み合わせ筒状にし、連結させた暗渠である。掘方の規模は、上幅 25～29cm、下幅 8～13cmで、確認面からの深さは 6～14cmである。掘方底面の標高は、南端が 28.09 m、北端が 28.00 mで、北に向かって 9 cm下がっている。断面は浅い U 字状で、壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。第1・2層は使用中に堆積した土で、第3層は埋土である。

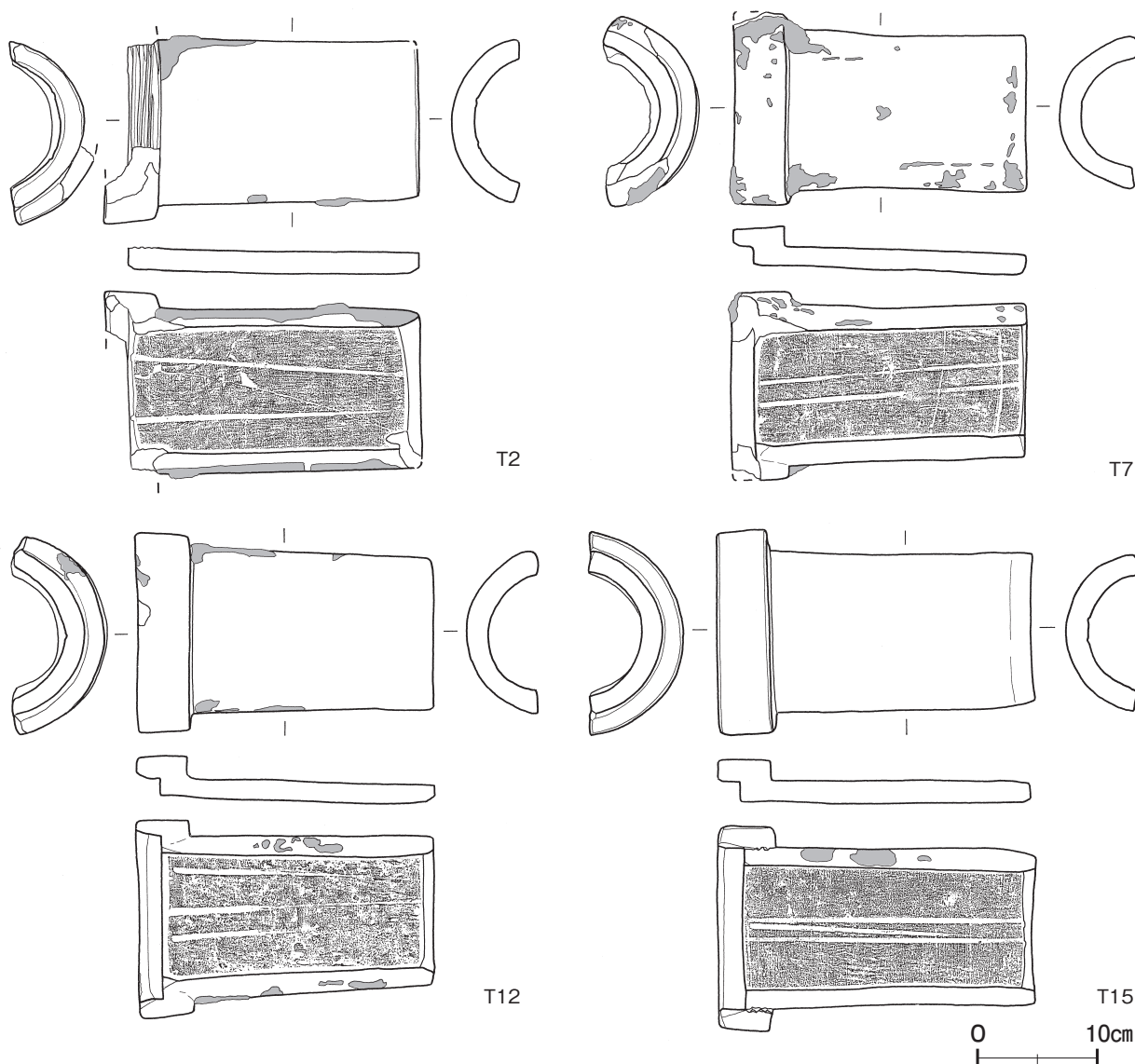
土層解説

- 1 暗褐色 砂粒多量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・砂粒微量

- 3 黒褐色 ロームブロック・細礫少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 瓦片 15 点（特殊瓦）が水路状施設の構造材として出土している。T 2・T12 が筒状に組み合わせられており、漆喰で接着された痕跡がある。他の出土した瓦にも漆喰の付着がみられることから、使用時にはすべて筒状に組み合わせられていたものと考えられる。

所見 時期は、出土した瓦から江戸時代と考えられる。瓦を使用した水路の類例がなく用途は明確にできなかったが、北に向かった傾斜がみられることから、調査区域の北側の斜面に向かう排水路であった可能性がある。瓦内部の堆積状況から、瓦内が詰まって機能しなくなり廃絶に至ったことが考えられる。



第 26 図 第 1 号水路状施設出土遺物実測図

第1号水路状施設出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	全長	覆部			筒部				胎土・色調	特徴	出土位置	備考		
			全幅	内径	高さ	尻幅	内径	高さ	厚さ						
T 1	特殊瓦	-	-	-	-	-	-	(5.5)	1.9	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 筒部内面ナデ	2条の棒状圧痕 大半が欠損	-		
T 2	特殊瓦	26.9	[17.1]	[15.0]	(7.1)	13.5	10.6	5.7	1.9	長石・石英 暗灰	凹面コビキ痕 筒部内面・接合部ナデ 接合部に刻み	2条の棒状圧痕 接合部一部欠損	-		
T 3	特殊瓦	27.4	[17.6]	[15.2]	8.2	13.2	9.9	6.2	1.7	長石・石英 黒褐	凹面コビキ痕 接合部一部欠損	3条の棒状圧痕 接合部に刻み	-		
T 4	特殊瓦	25.6	17.0	14.2	8.0	13.4	9.9	6.2	2.2	長石・石英 灰	凹面コビキ痕	2条の棒状圧痕	接合部ナデ	-	
T 5	特殊瓦	25.2	17.2	14.5	7.9	13.3	9.1	5.8	1.9	長石・石英 灰	凹面コビキ痕	3条の棒状圧痕	接合部ナデ	-	
T 6	特殊瓦	25.6	17.0	15.2	8.1	13.6	9.6	6.2	1.7	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 覆部内面にも漆喰	2条の棒状圧痕	接合部ナデ	-	
T 7	特殊瓦	25.0	16.3	-	8.2	13.0	9.3	6.4	1.7	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 筒部内面・接合部ナデ	2条の棒状圧痕		-	
T 8	特殊瓦	25.6	17.1	13.7	8.2	13.3	9.9	6.0	1.9	長石・石英 灰	凹面コビキ痕	2条の棒状圧痕	接合部ナデ	-	
T 9	特殊瓦	25.1	16.8	13.3	7.8	12.7	9.1	6.1	1.7	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 筒部内面・接合部ナデ	2条の棒状圧痕		-	PL 8
T10	特殊瓦	26.5	17.2	13.9	7.9	12.9	9.5	5.9	1.8	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 接合部に刻み	2条の棒状圧痕		-	
T11	特殊瓦	27.1	17.3	13.8	8.1	13.0	10.2	6.1	1.8	長石 灰	凹面コビキ痕 接合部に刻み	4条の棒状圧痕		-	
T12	特殊瓦	25.3	16.9	14.3	8.2	12.8	9.8	6.1	1.6	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 筒部内面・接合部ナデ	3条の棒状圧痕		-	PL 8
T13	特殊瓦	25.4	16.9	14.3	8.0	13.0	9.3	6.3	1.9	長石 灰	凹面コビキ痕	2条の棒状圧痕	接合部ナデ	-	
T14	特殊瓦	25.0	17.1	14.3	8.3	13.4	9.4	5.8	1.9	長石・石英 暗灰	凹面コビキ痕 筒部内面・接合部ナデ	2条の棒状圧痕		-	
T15	特殊瓦	27.0	17.5	14.2	8.1	13.2	9.8	6.2	1.9	長石・石英 灰	凹面コビキ痕 接合部に刻み	3条の棒状圧痕		-	

(2) 整地跡

調査開始当初、調査区域の北部は近現代の攪乱を受けていると認識していたが、第11号竪穴建物跡の調査を行っている際に、第1号水路状施設及び古い段階の整地跡が残存していることを確認した。時間的制約があったため、トレンチ調査を行い堆積状況の確認を行った。以下、遺構の特徴と出土した遺物について記述する。

第1号整地跡（第27・28図）

位置 調査区北部のA 2 b5・A 2 c5・A 2 d5・A 2 d6区、標高28mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第11号竪穴建物跡を掘り込み、第1号水路状施設に掘り込まれている。

範囲と形状 確認面上では大部分が攪乱を受けており、トレンチでの確認だったため、北東・南西方向6.08m、北西・南東方向は6.96mしか確認できなかった。断面で確認できる形状は、第11号竪穴建物跡を掘り込み鹿沼軽石層上層で犬走り状の平坦部を作出した後、再び下部のローム層まで掘り込んでいる。犬走り状平坦面までの深さ94cm、最深部までの深さ175cm、底部は平坦で、底面で5点の礫を確認した。壁は外傾している。

覆土 28層に分層できる。深掘りした箇所に南側から投げ込むように第1～6層を埋めた後、第7～21層を複数の段階に分けて南から北へ向かって埋めている。このうち第6～11・13層は固く締まっており、版築状に整地しながら埋めた様子が伺える。第27・28層は多量の灰と細粒化した炭化物で形成される層で、近代の磁器等が出土していることから、1945年8月の水戸大空襲で出た廃材を捨てたものと考えられる。

土層解説

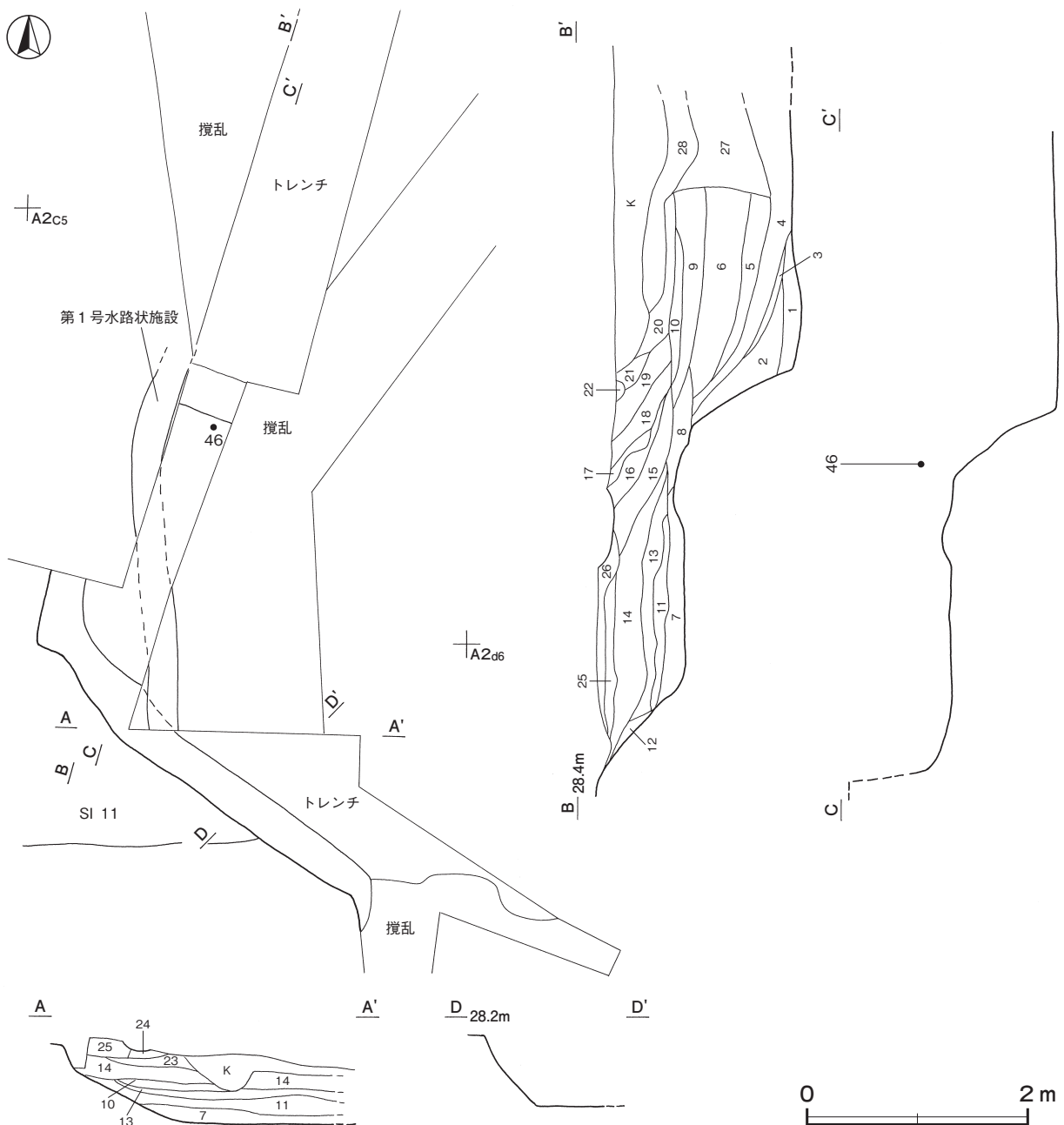
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 黄褐色 鹿沼パミスブロック多量 | 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子多量 | 8 黒褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 炭化物・焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 10 黒褐色 炭化物多量、ロームブロック中量 |
| 5 黄褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量 | 11 黒褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 6 褐色 ロームブロック多量、炭化物少量、焼土ブロック微量 | 12 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| | 13 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量 |

- | | | | |
|--------|----------------------------|----------|----------------------------|
| 14 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック微量 | 22 褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量 |
| 15 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 23 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 |
| 16 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量 | 24 にぶい褐色 | ロームブロック・砂粒中量 |
| 17 黄褐色 | ロームブロック多量 | 25 暗褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック微量 |
| 18 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 26 褐色 | ロームブロック中量, 粘土ブロック少量, 炭化物微量 |
| 19 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量 | 27 褐灰色 | 炭化物・灰極めて多量 |
| 20 黒褐色 | 細礫多量, 炭化物中量, ローム粒子・焼土粒子少量 | 28 黒褐色 | 炭化物・灰多量, 焼土粒子少量 |
| 21 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | | |

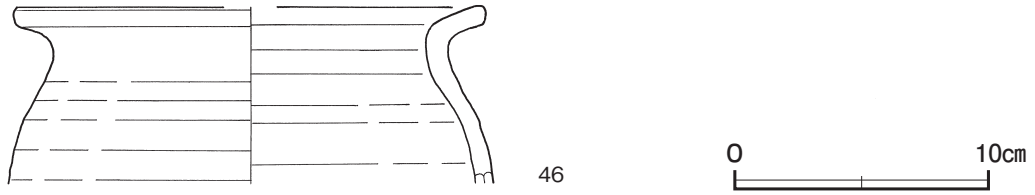
遺物出土状況 土師質土器片 9 点 (鉢類), 陶器片 3 点 (碗・皿・甕), 磁器片 5 点 (碗 4・蓋 1), 瓦片 6 点, 自然礫 8 点のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 土師器片 1 点 (甕類), 自然遺物 1 点 (ハマグリ) が出土している。

46 は埋土中層から出土したもので, 中近世の在り系甕と考えられるが, 産地や時期は明確にできなかった。

所見 時期は, 第 1 号水路状施設に掘り込まれていることや出土遺物から江戸時代と考えられる。広く攪乱を受けており, 全容を確認することはできなかったが, 調査区北部の全域が整地されていたと考えられる。



第 27 図 第 1 号整地跡実測図



第28図 第1号整地跡出土遺物実測図

第1号整地跡出土遺物観察表 (第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
46	陶器	甕	[18.4]	(7.0)	-	長石・石英・赤色粒子にぶい黄橙	外・内面ロクロナデ	-	不明	埋土中層	10%

(3) 土坑

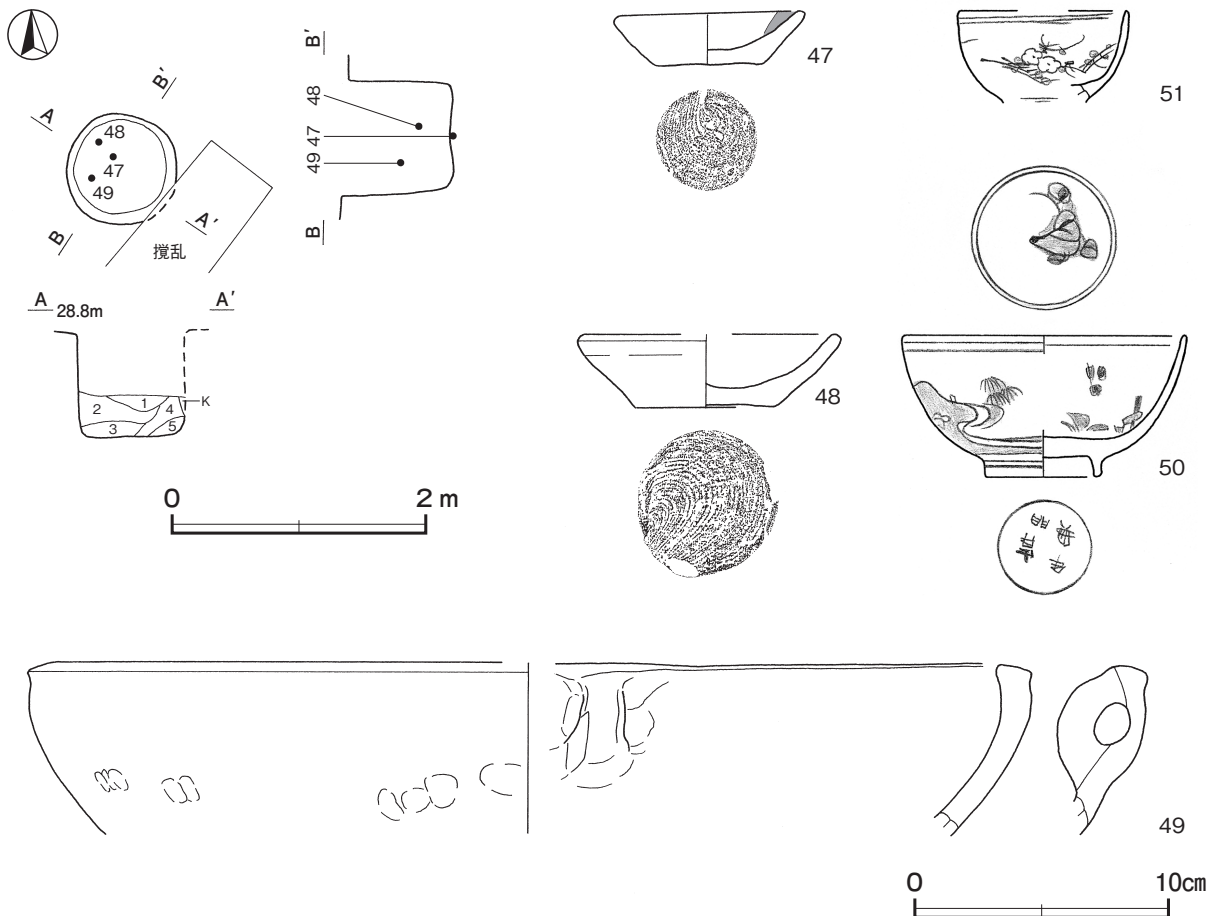
第192号土坑 (第29図)

位置 調査区中央部の A 2 e3 区, 標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第7号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径 0.88 m の円形で, 深さ 83 cm, 底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 下部は5層に分層できる。ロームブロックを含む不規則な堆積状況から, 埋め戻されている。



第29図 第192号土坑・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-----------|---|-----|----------|
| 1 | 褐色 | ロームブロック中量 | 4 | 暗褐色 | 焼土ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック少量 | 5 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量 | | | |

遺物出土状況 土師質土器片 10 点（小皿 7, 焙烙 3）, 磁器片 3 点（碗 2, 小碗 1）, 鉄製品 4 点（釘 2, 不明 2）, 炭化材（6.7 g）, 自然遺物 1 点（アカニシ）のほか, 土師器片 5 点（坏類 1, 甕類 4）, 須恵器片 8 点（坏類 4, 蓋 1, 盤 1, 壺類 1, 甕 1）が覆土中層から底面にかけて出土している。

所見 時期は出土土器から 17 世紀後半と考えられる。最終的に廃棄土坑として利用されたものであるが, 本来の性格は不明である。

第 192 号土坑出土遺物観察表（第 29 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
47	土師質土器	小皿	7.1	2.2	4.2	長石・石英・角閃石	橙	普通	外・内面ロクロナデ 口唇部面取り 底部回転糸切り 油煙付着	底面	95% PL 7
48	土師質土器	小皿	[10.0]	2.9	5.6	長石・石英・角閃石・赤色粒子・細礫	にぶい橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	50% PL 7
49	土師質土器	焙烙	[37.5]	(6.8)	-	長石・石英・黒色粒子	黒褐	普通	体部外面上位・内面横ナデ 指頭痕 輪積痕	覆土中層	20% PL 7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
50	磁器	碗	11.1	5.6	4.4	緻密 灰白	染付 山水文 口縁部外面二重圏線 内面圏線 体部外面下部圏線 見込 花卉文と二重圏線 高台部二重圏線 底部銘「宣明年製」と圏線	透明	肥前	覆土中	80% PL 7
51	磁器	小碗	[6.7]	(3.7)	-	緻密 灰白	染付 梅 口縁部二重圏線	透明	肥前 <small>カ</small>	覆土中	40%

第 222 号土坑（第 30 図）

位置 調査区北部の A 2e3 区, 標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 179・188 号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 径 1.22 m の円形で, 深さ 197cm, 底面は平坦である。壁は直立している。南壁と北壁に, 足掛けと考えられる幅 13cm, 高さ 15cm ほどの穴が縦に 3 か所ずつ空けてある。

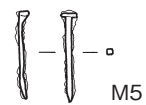
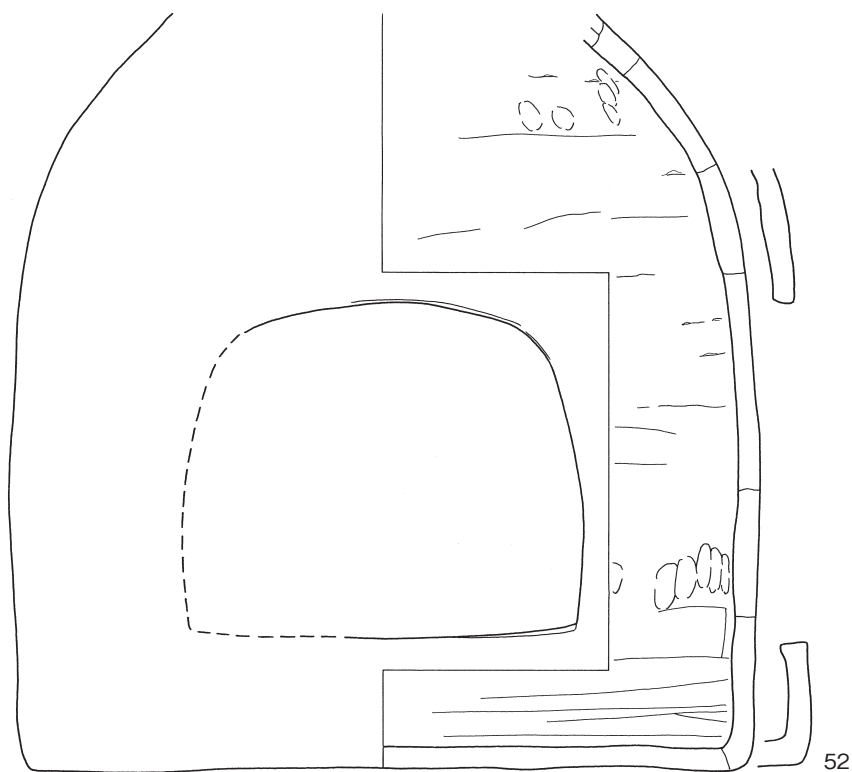
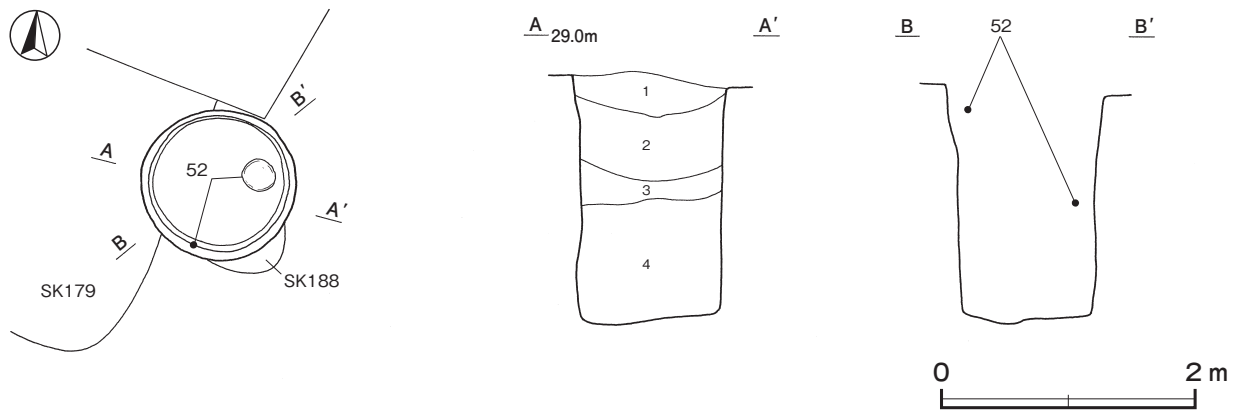
覆土 4 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

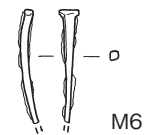
- | | | | | | |
|---|-----|------------------------|---|------|---------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・礫少量 | 3 | 灰黄褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量 |
| 2 | 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化材中量 | 4 | 黒褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片 11 点（小皿 1, 鉢類 8, 手焙り 2）, 磁器片 1 点（瓶類）, 鉄製品 24 点（釘 23, 小柄カ 1）, 炭化材（4033.6 g）, 自然礫 5 点のほか, 土師器片 7 点（坏類 4, 甕類 3）, 須恵器片 5 点（坏類 4, 蓋 1）が覆土中から出土している。52 は覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したもので, 底部は覆土中層から正位の状態で出土している。民俗資料で「ボウズ」と呼ばれるドーム形の手焙りで, 53 も同様の形状であると考えられる。炭化材は第 2 層下部に集中して出土している。

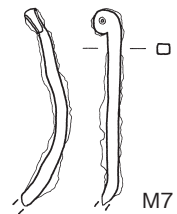
所見 時期は出土土器及び鉄製品から, 江戸時代後期と考えられる。覆土には焼土ブロックや炭化材を含んでおり, 火事の後始末のために廃材等を埋めた可能性がある。2 m 近い深さであるが, 底面はローム層で湧水はしておらず, 本来の性格は不明である。



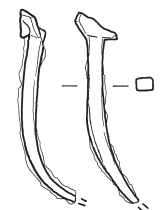
M5



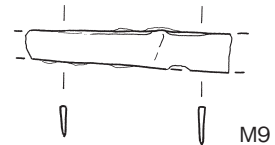
M6



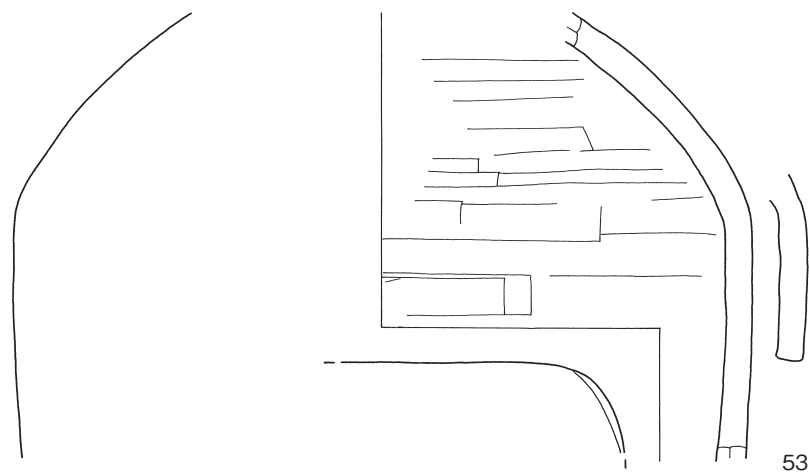
M7



M8



M9



第30图 第222号土坑·出土遗物实测图

第 222 号土坑出土遺物観察表 (第 30 図)

番号	種別	器種	器高	底径	窓幅	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
52	土師質土器	手焙り	(30.0)	27.8	(13.6)	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面細かい磨き 指頭痕 内面輪積痕を残すヘラナデ	覆土上層～中層	40% PL 7
53	土師質土器	手焙り	(17.8)	[29.4]	(11.3)	長石・石英・針状物質・礫	灰黄	普通	外面細かい磨き 内面ヘラナデ	覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 5	釘	3.6	0.7	0.2	0.9	鉄	断面方形 頭部折返し	覆土中	PL 8
M 6	釘	(4.5)	0.8	0.4	(1.6)	鉄	端部欠損 断面方形 頭部折返し	覆土中	PL 8
M 7	釘	(7.8)	0.6	0.8	(11.6)	鉄	端部欠損 断面方形 環頭釘 ₉	覆土中	PL 8
M 8	釘	(7.7)	1.7	0.5	(9.7)	鉄	断面方形 頭部折返し	覆土中	PL 8
M 9	小柄 ₉	(8.3)	1.6	0.2	(9.2)	鉄	端部・基部欠損	覆土中	PL 8

表 4 江戸時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
192	A 2e3	-	円形	0.88 × 0.88	83	平坦	直立	人為	土師質土器, 磁器, 鉄製品, 炭化材, 自然遺物	SI 7 → 本跡
222	A 2e3	-	円形	1.22 × 1.22	197	平坦	直立	人為	土師質土器, 磁器, 鉄製品, 炭化材	SK179・188 → 本跡

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明らかでない溝跡 1 条、土坑 51 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

第 4 号溝跡 (第 31・37 図)

位置 調査区西部の A 1 f0 ~ A 1 g0 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外へ延びており、北部が攪乱を受けているため、長さは 2.64 m しか確認できなかった。A 1 g9 区から北方向 (N - 21° - E) の A 1 f0 区まで直線的に延びている。規模は、上幅 90 ~ 120cm、下幅 56 ~ 70cm で、確認面からの深さは 24cm である。底面は平坦で標高差はほとんどない。断面は浅い U 字状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3 層に分層できる。第 3 層はロームブロックを含み、埋め戻された可能性があるが、第 1・2 層は含有物の少ない自然堆積である。

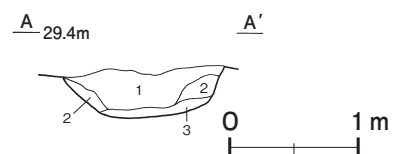
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒色 ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片 1 点 (深鉢), 土師器片 29 点 (坏類 5, 甕類 24), 須恵器片 16 点 (坏類 7, 壺類 2, 瓶類 2, 甕類 5), 石器 1 点 (紡錘車) が覆土中から出土している。

土器片は全て細片で、流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、土師器片及び須恵器片が出土しており奈良・平安時代の可能性があるが、出土遺物は全て破片であり明確にできない。形状から、区画溝の可能性はある。



第 31 図 第 4 号溝跡実測図

(2) 土坑

今回の調査で確認できた時期が明確でない土坑 51 基のうち、特徴のある第 189 号土坑については文章で解説し、柱穴の可能性のある土坑 21 基とその他の土坑 29 基については、それぞれ実測図と土層解説、一覧表で掲載する。柱穴の可能性のある土坑は、断面が U 字状で、形状から建物跡の柱穴の可能性を考え配列を検討したが、建物跡として判断できなかったものである。

第 189 号土坑（第 32 図）

位置 調査区中央部の A 2h3 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 9 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東側が調査区域外に延びているため、北東・南西径は 2.01 m で、北西・南東径は 1.86 m しか確認できなかった。軸方向は N - 68° - W で、楕円形と推定できる。深さ 43cm で、底面は平坦で、壁は外傾している。粘土が中央部に集中している。

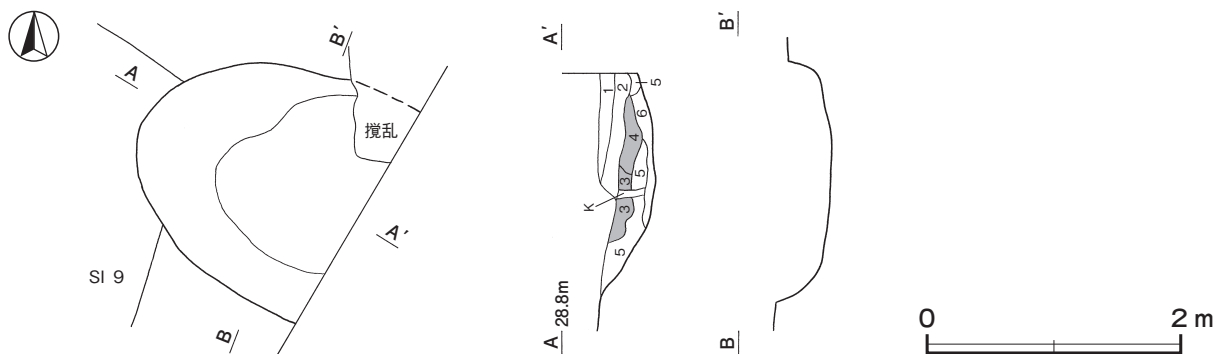
覆土 6 層に分層できる。ロームブロック・焼土ブロックを含む黒褐色土からなる第 1・2 層、粘土ブロックを含む第 3・4 層、ロームブロックを含む第 5・6 層に大別できる。それぞれが異なる段階で埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|----------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 4 灰黄色 | 粘土ブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 3 暗灰黄色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量 | 6 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片 31 点（坏 4，高台付坏 1，甕類 26），須恵器片 22 点（坏類 10，蓋 4，甕類 8），自然礫 1 点が覆土中から出土している。土器片は全て破片で、埋め戻しの土に混入したものと考えられる。

所見 時期は、土師器片及び須恵器片が出土しており奈良・平安時代の可能性があるが、出土遺物は全て破片であり明確にできない。粘土ブロック主体の層があるが、粘土を貼った様子はなく、性格は不明である。



第 32 図 第 189 号土坑実測図

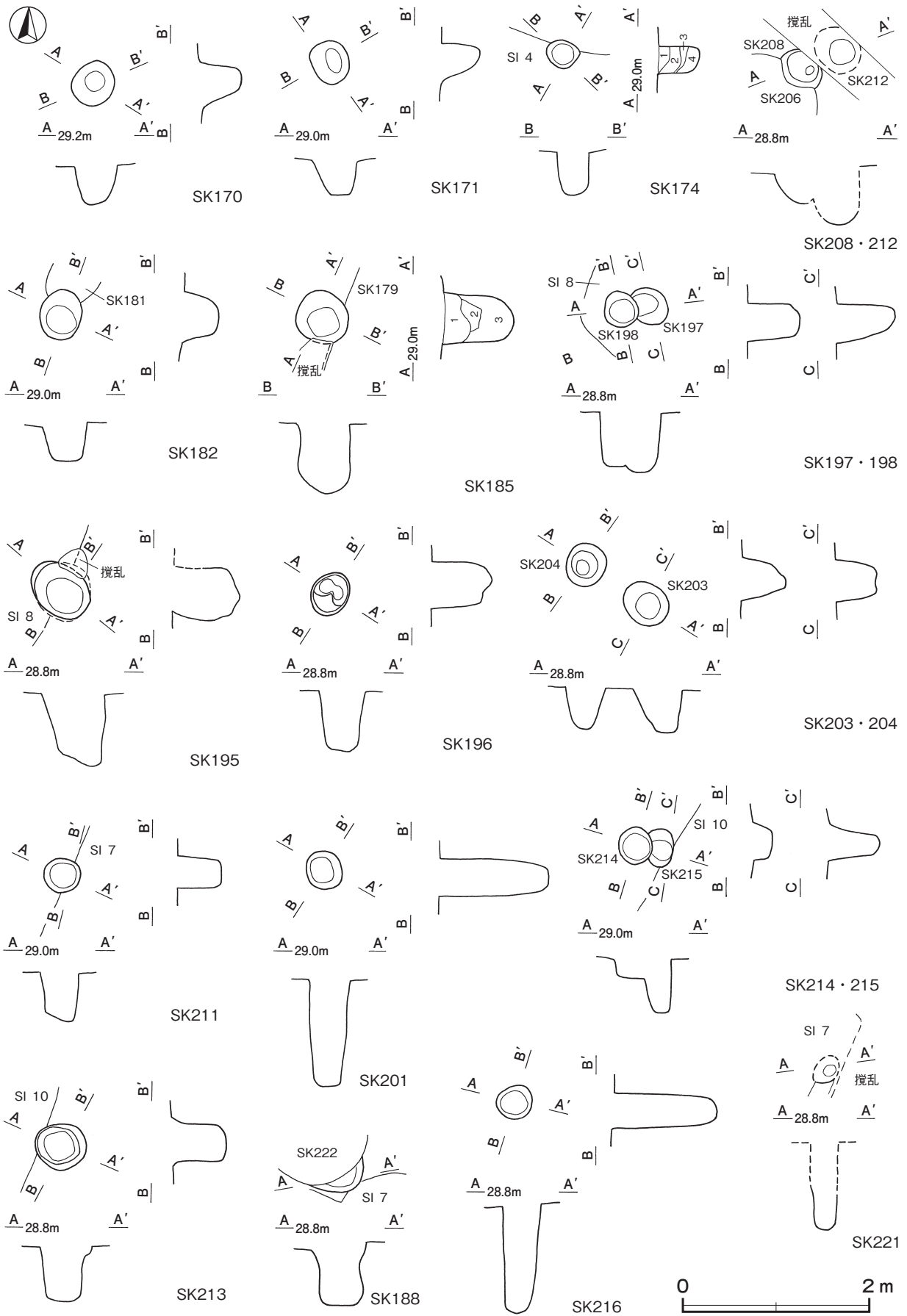
柱穴の可能性のある土坑（第 33 図）

第 174 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量

第 185 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 黒色 ロームブロック少量

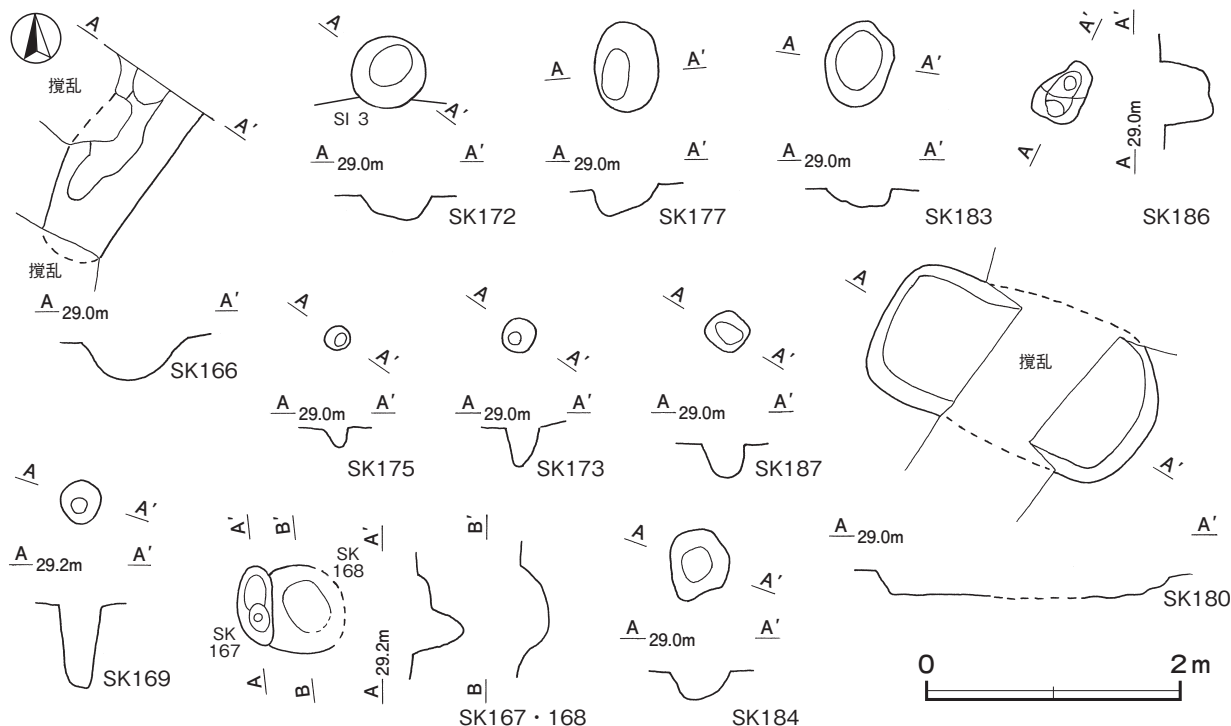


第 33 図 柱穴の可能性のある土坑実測図

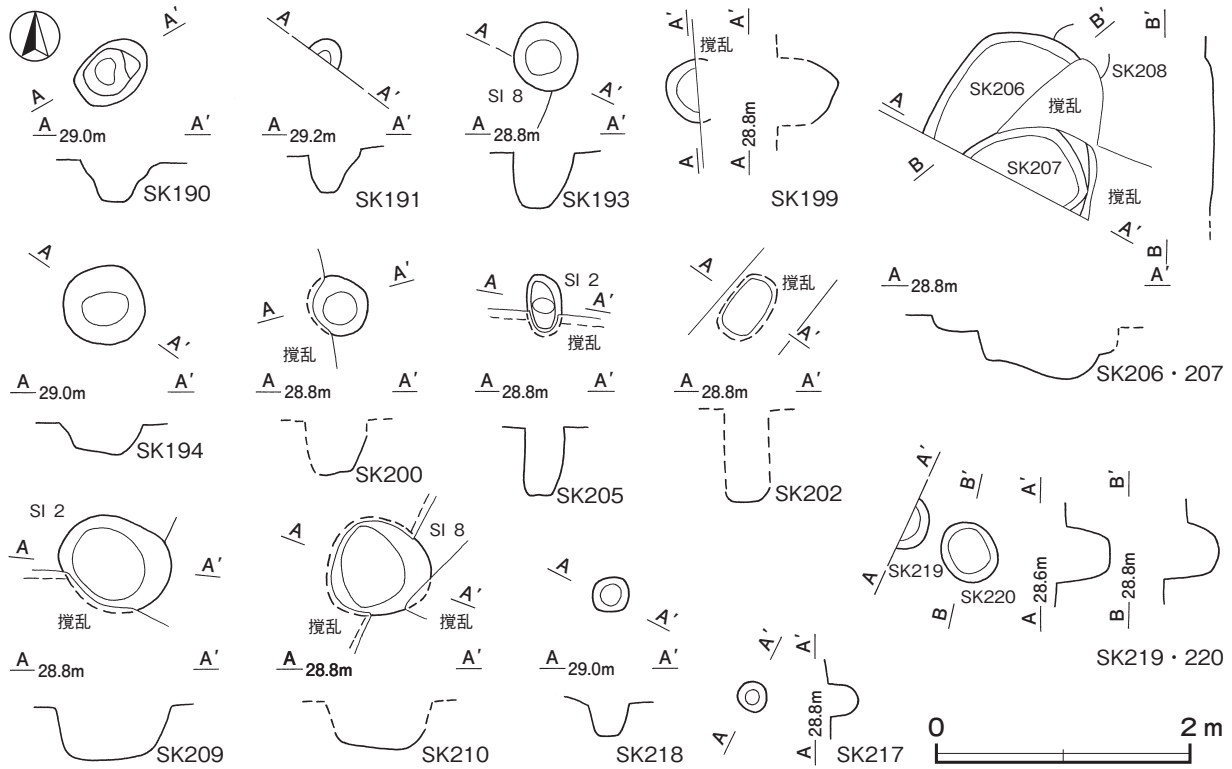
表5 柱穴の可能性ある土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
170	A 1 d7	N - 10° - E	楕円形	0.51 × 0.45	44	皿状	外傾	人為	須恵器, 土師質土器	
171	A 1 d5	N - 29° - W	楕円形	0.46 × 0.40	41	平坦	外傾	人為	須恵器, 土師質土器, 石器	
174	A 2 h1	N - 65° - W	楕円形	0.35 × 0.30	44	平坦	直立	人為		SI 4 → 本跡
182	A 2 f3	N - 3° - E	楕円形	0.55 × 0.46	42	平坦	外傾	人為		SK181 → 本跡
185	A 2 d3	-	円形	0.56 × 0.53	74	皿状	直立	人為		SK179 → 本跡
188	A 2 e3	-	[楕円形]	(0.63 × 0.18)	68	平坦	直立	人為		SI 7 → 本跡 → SK222
195	A 2 g3	N - 50° - W	楕円形	0.70 × [0.55]	70 ~ 78	凹凸	直立	人為		SI 8 → 本跡
196	A 2 g2	N - 32° - E	楕円形	0.50 × 0.40	55 ~ 65	凹凸	直立	人為		SI 8 → 本跡
197	A 2 g2	N - 50° - W	楕円形	0.45 × 0.38	62	皿状	直立	人為	須恵器	SI 8 → 本跡 → SK198
198	A 2 g2	-	円形	0.40 × 0.37	58	皿状	直立	人為	須恵器	SI 8, SK197 → 本跡
201	A 2 h2	N - 38° - W	楕円形	0.43 × 0.39	63	皿状	直立	人為	土師器	SI 10 → 本跡
203	A 2 g4	N - 59° - W	楕円形	0.52 × 0.44	44	平坦	外傾	人為		
204	A 2 g3	-	円形	0.46 × 0.43	50	平坦	外傾	人為		
208	A 2 g3	N - 53° - W	楕円形	0.48 × (0.34)	38	皿状	緩斜	人為		本跡 → SK206 · 212
211	A 2 e3	-	円形	0.40 × 0.38	52	平坦	外傾	人為	土師器	SI 7 → 本跡
212	A 2 g3	N - 50° - W	[楕円形]	[0.52 × 0.44]	64	平坦	外傾	人為		SK208 → 本跡
213	A 2 i3	N - 84° - W	楕円形	0.56 × 0.50	59	平坦	直立	人為	土師器, 土師質土器	SI 10 → 本跡
214	A 2 h2	N - 2° - W	楕円形	0.40 × 0.33	19	平坦	直立	人為		SK215 → 本跡
215	A 2 h2	N - 4° - E	楕円形	0.42 × (0.26)	56	皿状	直立	人為		SI 10 → 本跡 → SK214
216	A 2 h3	-	円形	0.39 × 0.36	118	皿状	直立	人為	土師器, 須恵器	SI 9 → 本跡
221	A 2 e4	N - 28° - E	[楕円形]	[0.34 × 0.25]	(49)	皿状	直立	人為		SI 7 → 本跡

その他の土坑 (第 34・35 図)



第 34 図 その他の土坑実測図 (1)



第 35 図 その他の土坑実測図 (2)

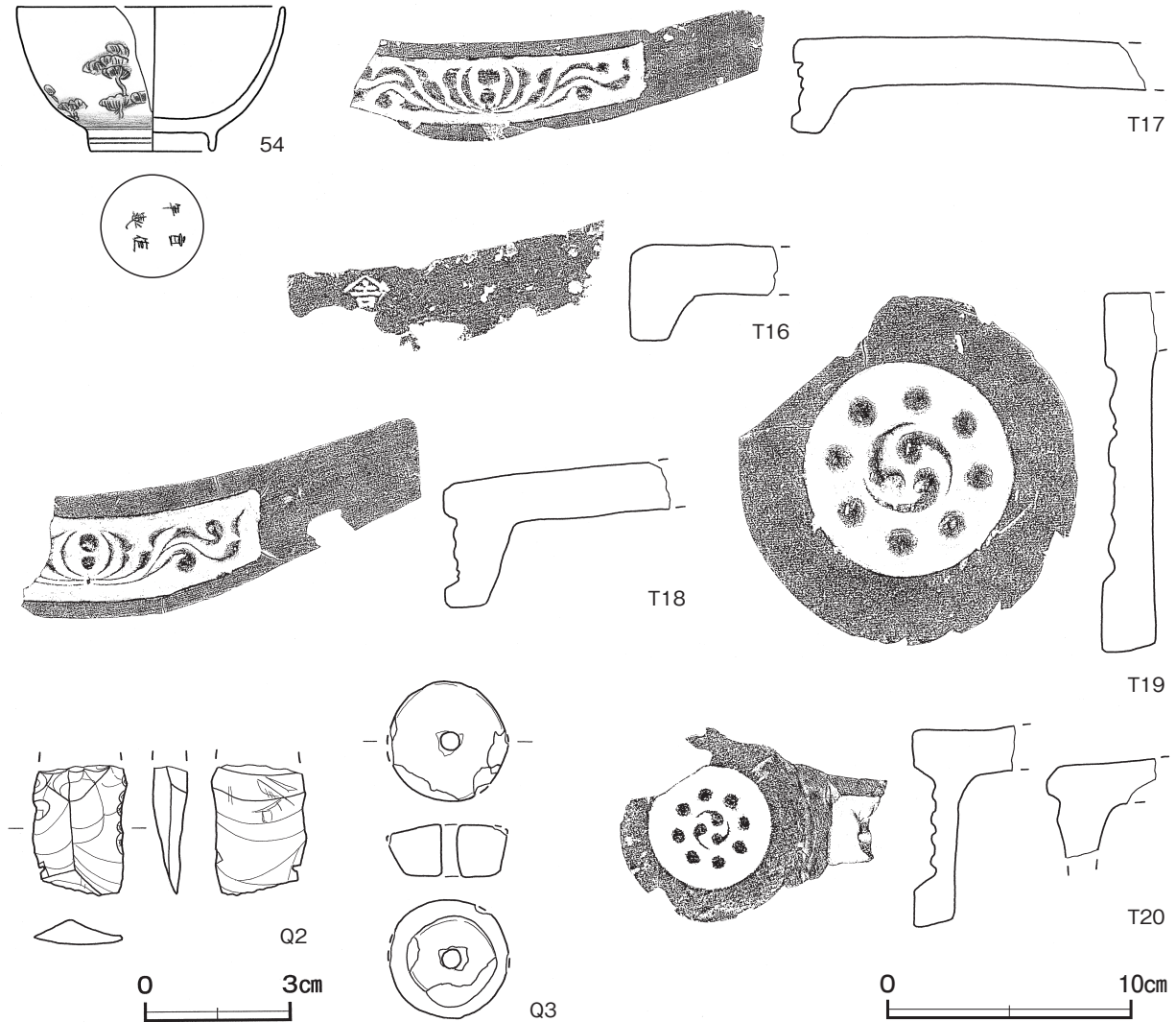
表 6 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
166	A 1 d6	N - 31° - E	[楕円形]	(1.44 × 0.84)	34	平坦	緩斜	人為	弥生土器, 土師器, 須恵器	
167	A 1 e7	N - 6° - W	楕円形	0.64 × 0.28	13・41	皿状	外傾 緩斜	人為	須恵器	SK168 → 本跡
168	A 1 e7	N - 28° - W	[楕円形]	0.73 × (0.66)	25	平坦	緩斜	人為		本跡 → SK167
169	A 1 g0	-	円形	0.33 × 0.33	68	皿状	直立	人為		
172	A 1 d5	-	円形	0.60 × 0.59	18	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器, 須恵器	SI 3 → 本跡
173	A 2 g1	-	円形	0.29 × 0.26	30	皿状	外傾	人為	須恵器	
175	A 1 g0	-	円形	0.21 × 0.19	15	皿状	直立 外傾	自然		
177	A 1 d6	N - 2° - E	楕円形	0.71 × 0.51	25	皿状	直立 緩斜	自然		
180	A 2 f3	N - 67° - W	楕円形	2.30 × 1.14	20	平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器	
183	A 2 f3	N - 10° - E	楕円形	0.68 × 0.52	20	皿状	緩斜	人為	須恵器	
184	A 2 e3	N - 16° - E	楕円形	0.56 × 0.48	23	皿状	緩斜	人為		
186	A 2 e3	N - 32° - E	楕円形	0.51 × 0.38	42	平坦	外傾	人為	縄文土器, 土師器, 土師質土器	
187	A 2 e3	-	円形	0.31 × 0.30	28	皿状	外傾	人為		
189	A 2 h3	N - 68° - W	[楕円形]	2.01 × (1.86)	43	平坦	外傾 緩斜	人為	土師器, 須恵器	SI 9 → 本跡
190	A 2 h2	N - 43° - E	楕円形	0.61 × 0.45	32	皿状	外傾	人為	土師器, 須恵器	
191	A 2 g1	-	[円形]	(0.16 × 0.28)	37	皿状	外傾	人為		
193	A 2 g3	-	円形	0.55 × 0.52	45	平坦	外傾	人為	土師器	SI 8 → 本跡
194	A 2 f3	-	円形	0.65 × 0.64	24	平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器	
199	A 2 e4	-	[円形]	(0.50 × 0.25)	(30)	皿状	緩斜	人為		
200	A 2 d4	N - 54° - W	[楕円形]	[0.50 × 0.44]	(34)	平坦	外傾	人為		
202	A 2 e3	N - 36° - E	楕円形	(0.56 × 0.34)	(10)	平坦	直立 外傾	人為		SI 7 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
205	A 2 f2	N - 3° - W	[楕円形]	[0.60 × 0.33]	57	皿状	直立 外傾	人為		SI 2→本跡
206	A 2 g3	N - 64° - W	[楕円形]	(1.44 × 1.16)	34	平坦	緩斜	人為		SK207・208→ 本跡
207	A 2 g3	N - 64° - W	[楕円形]	0.94 × (0.48)	32	平坦	緩斜	人為	土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器, 磁器, 鉄製品	本跡→SK206
209	A 2 g2	N - 55° - W	楕円形	0.86 × 0.75	42	平坦	外傾	人為		SI 2→本跡
210	A 2 g2	-	[円形]	[0.84 × 0.80]	38	平坦	外傾	人為		SI 8→本跡
217	A 2 h2	-	円形	0.25 × 0.24	23	皿状	直立	人為		
218	A 2 h2	-	円形	0.32 × 0.30	25	平坦	外傾	人為		
219	A 2 d4	-	[楕円形]	(0.42 × 0.16)	42	平坦	外傾	人為		
220	A 2 d4	N - 40° - W	楕円形	0.51 × 0.43	42	皿状	外傾	人為		

(3) 遺構外出土遺物 (第36図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



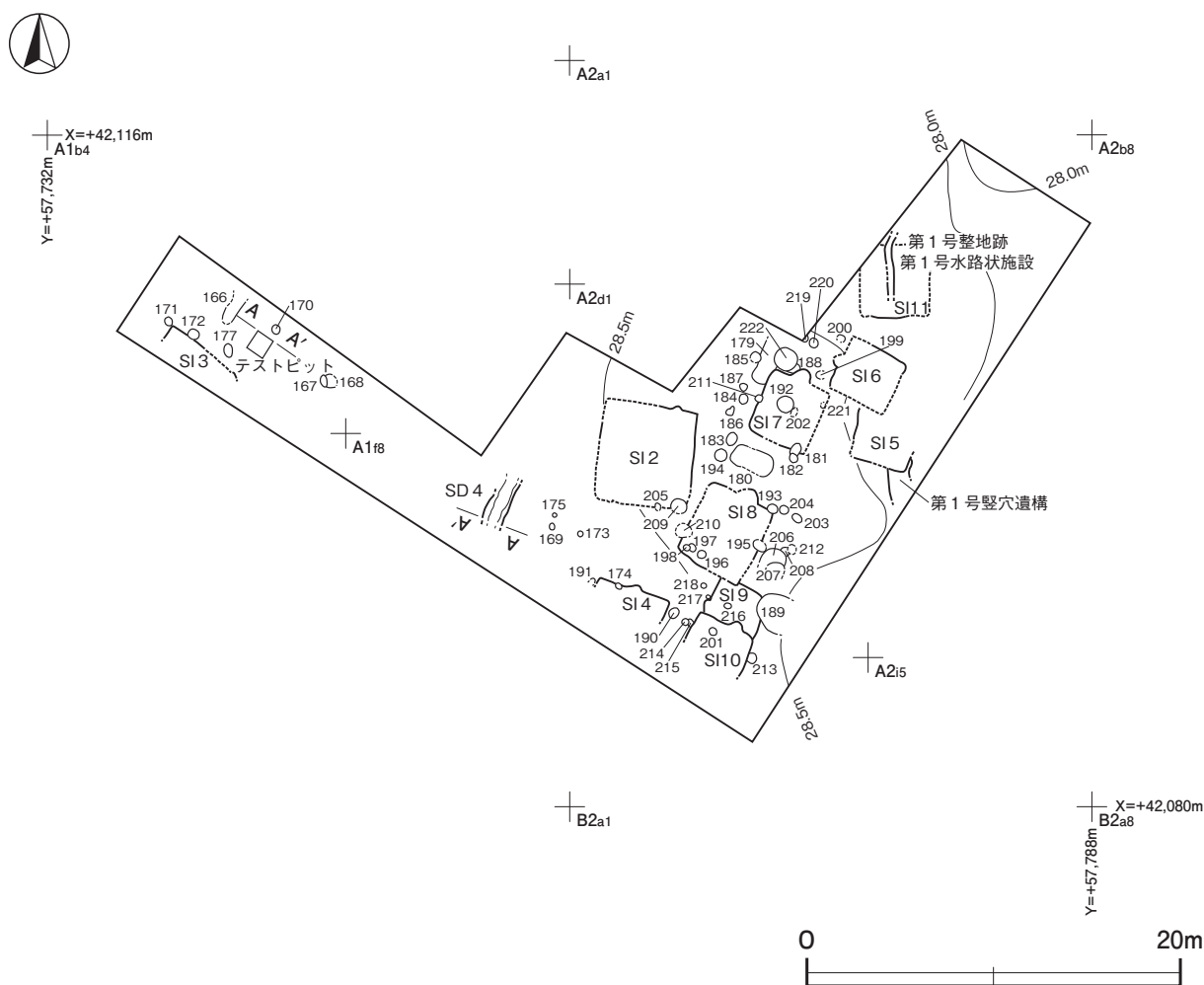
第36図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第 36 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文 様・特 徴	釉薬	産 地	出土位置	備 考
54	磁器	碗	11.0	6.0	5.0	緻密 灰白	染付松 体部外下二重線 高台部二重線 底部銘「宣徳年製」 白泥塗り	透明	不明	SI 7	60% PL 7

番号	器 種	長さ	幅 (孔径)	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 2	剥片	(2.7)	2.0	0.7	(3.2)	チャート	縦長剥片 一部使用痕	SI 3	PL 8
Q 3	紡錘車	4.9	0.8	2.2	(66.5)	頁岩	全面研磨 上下面剥離	SD 4	PL 8

番号	器種	全長	全幅	巴 部				軒 平 部				胎土・色調	文 様・特 徴	出土位置	備 考	
				瓦当 径	文様 区径	珠径	珠数	文様 区幅	文様 区厚	上周 縁幅	下周 縁幅					瓦当 厚
T16	棧瓦	(5.9)	(13.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	4.0	長石・石英 灰	表裏面雲母 印「八吉」	表土	
T17	軒平瓦	(14.6)	(17.5)	-	-	-	-	(123)	2.2	0.8	0.5	3.9	長石 暗灰	唐草文 表裏面雲母	表土	PL 8
T18	軒平瓦	(9.4)	(17.2)	-	-	-	-	(103)	3.1	0.9	0.8	5.0	長石・石英・黒 色粒子 暗灰	唐草文 表裏面雲母	表土	PL 8
T19	軒丸瓦	(2.3)	14.5	14.8	8.9	1.4	8	-	-	-	-	-	長石・石英 灰	巴文左 表裏面雲母	表土	PL 8
T20	軒棧瓦	(5.6)	(11.6)	8.0	5.0	0.6~ 0.7	8	(15)	(3.3)	0.7	-	(3.7)	長石・石英 灰	巴文右 裏面コビキ痕（コビキB） 表裏面雲母	表土	PL 8



第 37 図 遺構全体図

第4節 ま と め

調査の結果、奈良・平安時代の竪穴建物跡 10 棟、竪穴遺構 1 基、土坑 2 基、江戸時代の水路状施設 1 条、整地跡 1 か所、土坑 2 基等を確認した。ここでは、古代の集落跡と水戸城北三の丸時代の本調査区についての様相を述べ、若干の検討を加えまとめとする。

1 奈良・平安時代の集落跡について

今回の調査で確認した 10 棟の竪穴建物跡は、出土遺物から以下のような時期に分けられる。8 世紀後葉に比定できるものが第 4・9・11 号竪穴建物跡、9 世紀前葉に比定できるものが第 5 号竪穴建物跡、9 世紀中葉に比定できるものが第 2・7・8・10 号竪穴建物跡である。9 世紀中葉に比定される 4 棟のうち第 2・8 号竪穴建物跡は、その距離から同時に存在していたとは考えにくい。第 2 号竪穴建物跡は、第 5・11 号竪穴建物跡と軸方向が近似することや、後述するように集落の中心的建物と考えられることから、他の竪穴建物よりも長期間に渡って存在していたものと考えられる。以上のことから第 2 号竪穴建物跡は、第 8 号竪穴建物より先に存在していたものと考えられる。

10 棟の竪穴建物跡の中で、特徴的な構造をしているのが第 2 号竪穴建物跡である。北側の支柱穴が壁際に設けられ、内傾して掘り込まれていることから、支柱は南壁に向かって斜めに立っていたことが考えられるものである。類似した構造は、茨城町大塚遺跡の第 22 号竪穴建物跡¹⁾などにみることができる。茨城町大戸富士山遺跡などでは南側の柱穴も壁際に内傾した状態で掘り込まれているものもある²⁾が、これらを含めても奈良・平安時代の竪穴建物跡全体における割合は少なく、特殊な構造と考えられる。こうした構造は、室内を広く利用しようとする意識があるものと考えられるが、今回の調査では明確な利用目的を判断するには至らなかった。また、貼床の埋土に焼土ブロックが含まれている点も特筆できる。出土している遺物も、斧、鎌、腰帯具といった金属製品や灰釉陶器片など、特徴的な遺物が出土している。こうした点から、集落の中心的建物として存在していたことが考えられる。

第 2 号竪穴建物跡から出土した腰帯具（巡方）は、青銅製で裏面に鍍金が施され、表裏の金具が接着された状態のものである。巡方や丸軛は腰帯の飾り金具であり、革帯を挟み込んで留められていたことが想定される。今回のように表裏が接着した状態で 1 個体のみが出土するということは、初めから帯に付けられていなかったか、革帯ごと切り離されたかのどちらかの状況である。そこから、腰帯に留める飾り金具としてではない用途があったことが考えられる。田中広明氏は、集落遺跡から 1・2 点出土する腰帯具について「金具を革地ごと切断し、再分配した」可能性を述べている³⁾。巡方の時期は、付章に掲載している成分分析の結果「砒素（As）が添加した銅製品は奈良～平安時代初期に特有のもの」であり、これは史料によって導き出される銅製腰帯が使用された時期（707～810 年、一時禁止時期あり）に合致する。また、田中氏の編年⁴⁾によると第 I～IV 期の四段階に分けられるうちの第 III 期にあたり、これは銅製腰帯が使用された最終段階に当たる。一方、巡方が出土した第 2 号竪穴建物跡は、出土土器から 9 世紀中葉に比定され、巡方の年代との時間差が生じることとなり、腰帯具がある種の伝世品となったことを示している。ここから先は推論となるが、今回出土した巡方は、田中氏が述べている通り、役人が腰帯として使用していたものを切り離して複数の人に分配したものであろう。分配された人間は地域の有力者であり、分配された巡方は紐帯としての意味や、威信材としての役割を持っていたものと思われる。

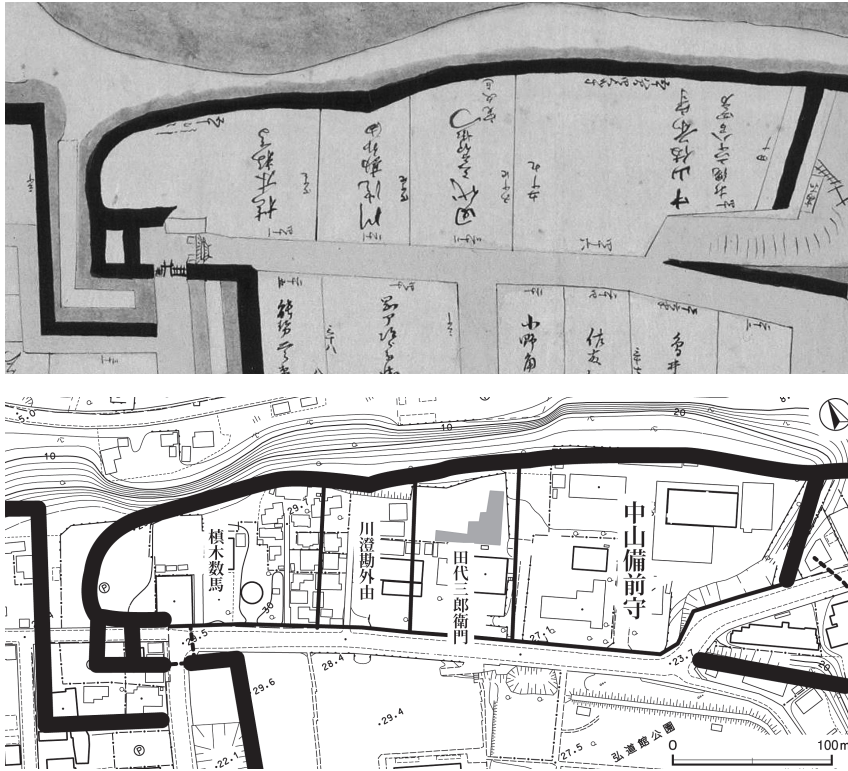
この他、9世紀中葉に比定される4棟からは、前述した腰帯具を始めとした金属製品や灰釉陶器、墨書土器などの遺物が出土している。これらの遺物から、5kmほど離れた那賀郡衙との関係性を伺うことができる。今回は、郡衙との関連性を考察し、集落の性質を検討するまでは至らなかった。今後の検討課題としたい。

2 江戸時代の北三の丸について

今回の調査では、量的には多くなかったものの、江戸時代に位置付けられる遺構や遺物も確認した。ここでは、現存する絵図などをもとに水戸城北三の丸の歴史を概観し、確認した遺構の位置づけを試みる。水戸城全体の改修に関しては、当財団報告第329集にまとめてある⁵⁾。北三の丸については、一番古い絵図である「正保水戸城図」（国立公文書館所蔵）によると、この絵図が作成された時点で廓として成立している。第1号整地跡は、正保年間（1644～1648）には工事が完了していた可能性が高い。水戸城の歴史の上でこの土地を変革した時期を検討すると、佐竹義宣が文禄2年（1593）から始めた普請か、徳川頼房が寛永2～15年（1625～1638）にかけて行った城の大修築が該当すると考えられる。水戸徳川氏の城となった水戸城は、当初、三の丸全体が家臣団の屋敷地となっており、東西に走る二つの道路によって北三の丸・中三の丸・南三の丸に分けられていた。北三の丸の一番東側は江戸時代を通して附家老中山氏の屋敷があった。

ここで、今回調査した範囲が誰の拝領地に当たるのかを検討するため、間尺が記入してある絵図を元に屋敷地割を復元した（第38図）。図中、拝領者の名前の下に「寛文迄」という記載があり、寛文年間（1661～1672）頃の絵図であることが分かる。この時期の北三の丸には4軒の屋敷が並んでおり、復元した図から今回の調査区域は、田代三郎衛門の拝領地内に該当する。その後の状況を他の史料から検討すると、田代三郎衛門が拝領替えになった後、松平権之助が拝領されており⁶⁾、この時点から北三の丸では1軒減り3軒の屋敷が並ぶようになる。文政9年（1826）に描かれた「水戸地図」（徳川博物館所蔵）では、中山家の屋敷範囲が広くとられるようになっており、中三の丸の中央を南北に走る道路との位置関係から、本調査区は中山家の拝領地内に入ったものと考えられる。天保12年（1841）の弘道館設立に伴い、中三の丸がなくなり、拝領地が大きく変化したようだが、水戸藩内における中山氏の力が強くなっていった⁷⁾ことを踏まえると、中山氏の屋敷地が狭まることはなかったと思われる。以上のことを整理すると、明確に比定することは難しいが、今回の調査で確認した17世紀後半の第192号土坑は田代家または松平家の屋敷に、江戸時代後期の第222号土坑は、中山家の屋敷に関わる遺構であると考えられる。

次に第1号水路状施設を検討する。本跡に使用されている瓦は、筒状に組み合わせると土管の形になるので、屋根瓦としては使用されないものである。水路専用に作られたものであると考えられるが、土浦市土浦城⁸⁾や港区汐留遺跡⁹⁾で同形の瓦の出土を数点見る程度で類例に乏しく、利用形態を残した事例は確認できなかった。瓦の時期は、製作技法や胎土、焼成の具合などから、江戸時代のものである。明確ではないが剥離剤と思われる粉の痕跡から新しい部類に入るものと思われ、本跡は中山氏の屋敷に関連する遺構であると考えたい。江戸時代の水路は通常、木や竹または石を使用するのが一般的である。当城跡周辺でも、徳川光圀が造らせた笠原水道では石や木を主として用いたことが分かっており¹⁰⁾、水戸城二の丸内の調査でも石組みの水路を確認している¹¹⁾。そうした背景の中で漆喰で固めた瓦を使用した意図については、今回は明確にできなかった。大阪市荘厳浄土寺境内遺跡では、中世の平瓦と丸瓦を組み合わせた近世初頭の暗渠が確認されている¹²⁾。瓦は抜き取られ一部しか残っていないが、報告では北にある池に水を流し入れるための施設であるとしている。こちらは不要な瓦を転用しており、当城跡の事例とは目的が異なるものと考えられるが、こうした事例が多少なりとも増えることで、瓦を利用した理由も見えてくるものと思われる。



第38図 上：水戸城絵図「江戸期水戸武士小路明細図（上市の部）」（茨城県立図書館所蔵）
下：水戸城北三の丸復元図（水戸市都市計画基本図DMデータ 2,500分の1から作成）

今回確認した遺構を、水戸藩の歴史を踏まえ検討した。細片のため図示できなかったが、表土資料の中に中山氏と関連の深い松岡焼や、第9藩主徳川斉昭が主導した七面焼とみられる陶器片が含まれている¹³⁾。江戸時代の遺構に関しては調査から得た情報が少なく、詳細な検討は行えなかった。今後の調査や類例の増加を期待する。

註

- 1) 長谷川聡 田中幸夫 小野克敏「大塚遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第242集 2005年3月
- 2) 石川義信 小室弘毅「羽黒山遺跡 大戸富士山遺跡 やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第279集 2007年3月
- 3) 田中広明「律令時代の身分表象（Ⅱ）」『土曜考古』第16号 1991年9月
- 4) 田中広明「律令時代の身分表象（Ⅰ）」『土曜考古』第15号 1990年5月
- 5) 清水哲「水戸城跡 一般県道市毛水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第329集 2010年3月
- 6) 江原忠昭編集『水戸の町名』水戸市役所 1982年3月
- 7) 永井博「水戸藩名家老中山家関係文献調査の成果」『東京都新宿区白銀町西遺跡Ⅲ 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』清水総合開発株式会社 共和開発株式会社 2013年12月
- 8) 石川功 窪田恵一『史跡 土浦城跡 茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会 2002年2月
- 9) 小林博範 齊藤進 西澤明 小島正裕「汐留遺跡Ⅱ 旧汐留貨物駅跡地内遺跡の調査」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第79集 2000年3月
- 10) 関口慶久・小松崎博一・川口武彦・色川順子「笠原水道 第6次・10次・11次発掘調査報告書」『水戸市埋蔵文化財調査報告』第36集 2010年3月
- 11) 松林秀和「水戸城跡 茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第362集 2012年3月
- 12) 村元健一・黒田慶一・安部みき子・池田研『莊厳浄土寺境内遺跡発掘調査報告』財団法人 大阪市文化財協会 2004年3月
- 13) 七面焼および瓦については水戸市教育委員会の関口慶久氏にご教示いただいた。

付 章

茨城県水戸城跡出土金属製品成分分析調査

(株)吉田生物研究所

1 はじめに

茨城県水戸城跡から出土した金属製品1点について、材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

2 試料

調査した試料は表1に示す金属製品1点である(写真1, 2)。

表1 資料表

No.	資 料 名	概 要
1	銅製品〈腰帯具(巡方)〉	土や緑青に覆われている。裏面に鍍金が見られる

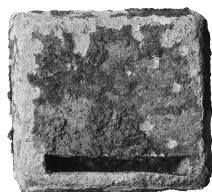


写真1 : No. 1 巡方 表

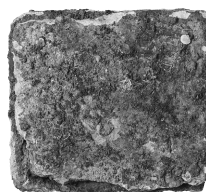


写真2 : No. 1 巡方 裏

3 方法

試料を用いて蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置は島津製作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置EDX-800を用いた。

4 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す(図1, 2)。表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。また、Si ~ Fe, Iは土壌に由来する成分と思われる。

No. 1 巡方は主成分として銅(Cu)が検出され、その他に検出されている成分の中に錫(Sn)が見られることから、No. 1 巡方は銅錫合金の青銅製品と考えられる。高い割合を示している鉛(Pb)は、製品を造る際の湯通りを良くする事や銅の融点を下げる為に添加されたものである。これに加えて砒素(As)も、銅の精錬過程で残留する割合(~数%)を超えており、鉛(Pb)と同様の目的で添加された可能性がある。砒素(As)が添加した銅製品は奈良~平安時代初期に特有のものである。その他の銀(Ag)、アンチモン(Sb)、ビスマス(Bi)

は銅(Cu)の精錬過程で精錬しきれずに残留したものと考えられる。また No. 1 巡方は裏面の分析結果から、金(Au)と共に水銀(Hg)が検出されているので、水銀(Hg)を用いた金アマルガム法による鍍金が施されていたと推察される。

参考文献

成瀬正和「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『日本の美術』第 393 号 p87-98 至文堂 1999 年 2 月

表 2 茨城県水戸城跡出土遺物成分分析結果一覧表

元素	No. 1 表 (wt%)	No. 1 裏 (wt%)
Si	26.24	20.43
K	0.44	-
Ca	1.25	0.92
Sc	0.05	-
Ti	0.41	-
Fe	3.95	3.20
Cu	33.06	35.41
As	7.99	7.82
Ag	0.31	0.70
Sn	0.66	0.87
Sb	0.87	1.75
I	0.07	0.23
Au	-	2.57
Hg	-	0.51
Pb	24.65	24.77
Bi	-	0.76

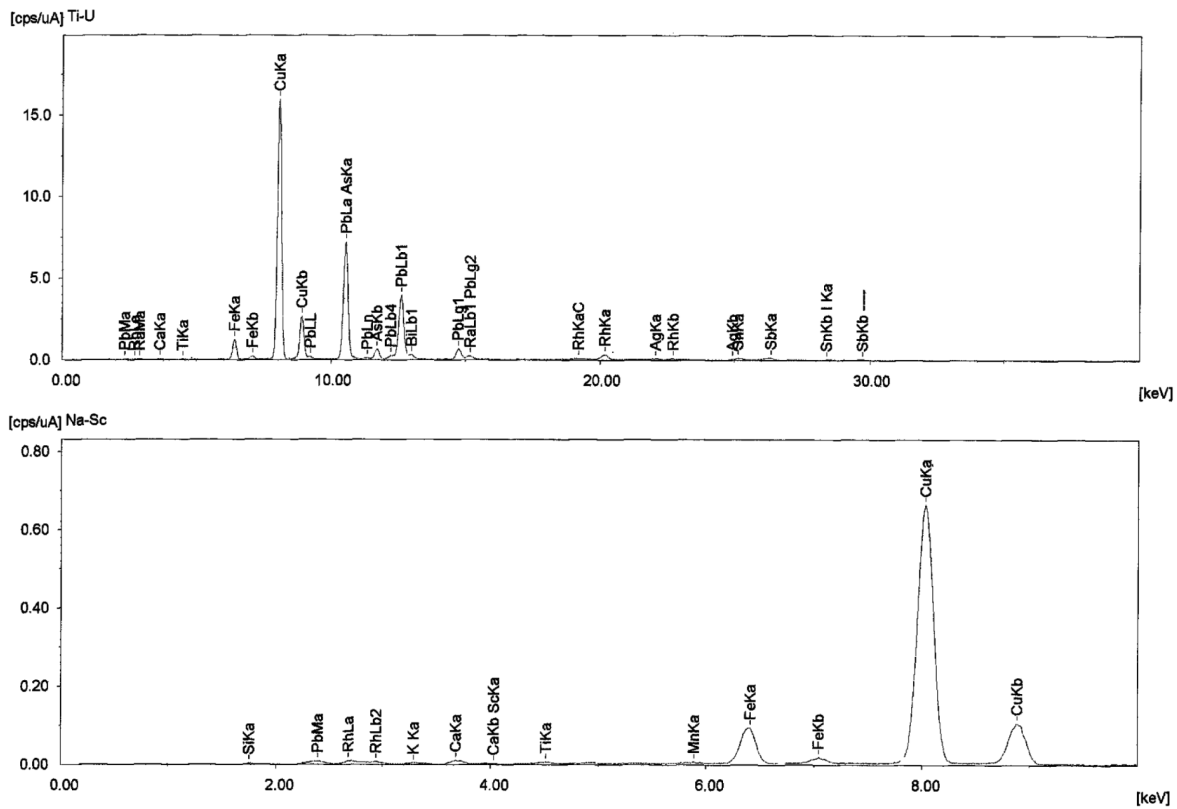


図 1 No. 1 巡方表

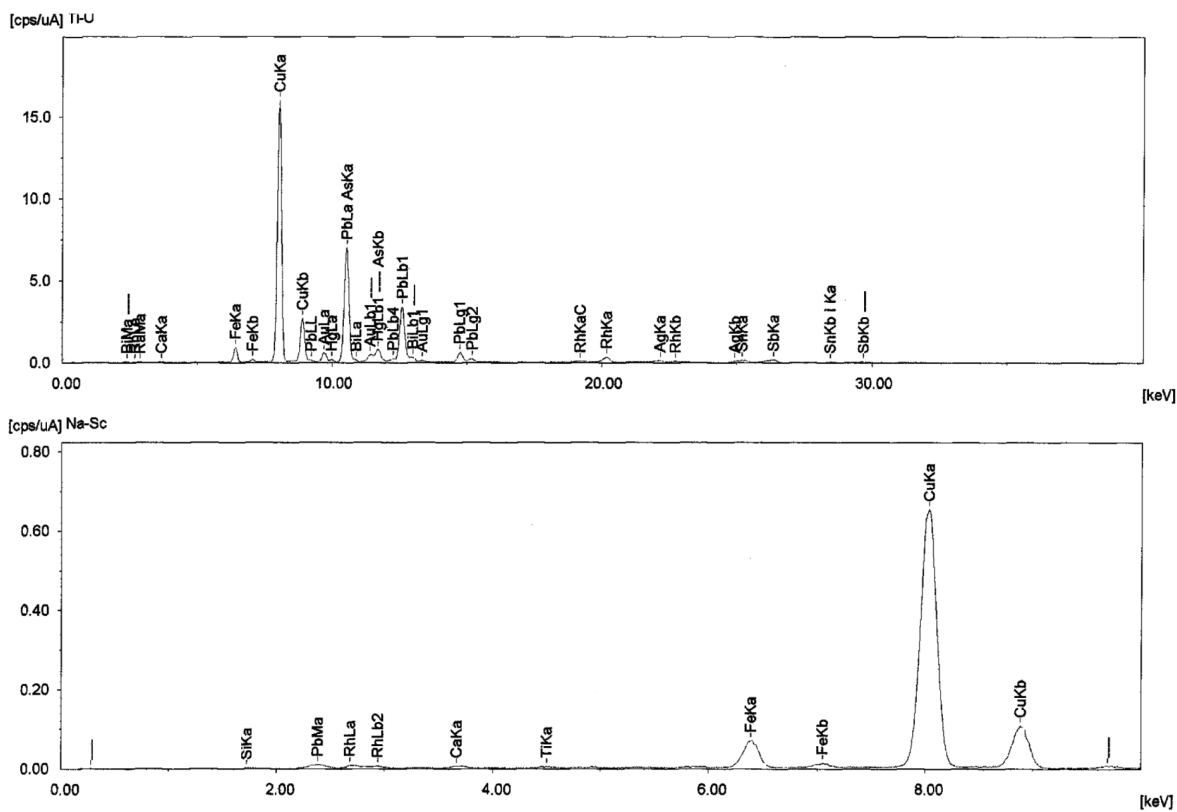


図 2 No. 1 巡方裏

写 真 图 版



調査区全景



調査区全景
(南部)



第2号竖穴建物跡
P5遺物出土状況

PL2



第2号竖穴建物跡
完掘状況



第3号竖穴建物跡
完掘状況



第4号竖穴建物跡
竈遺物出土状況

第7号竖穴建物跡
完掘状況



第8号竖穴建物跡
完掘状況



第9号竖穴建物跡
完掘状況



PL4



第10号竖穴建物跡
遺物出土状況



第1号水路状施設

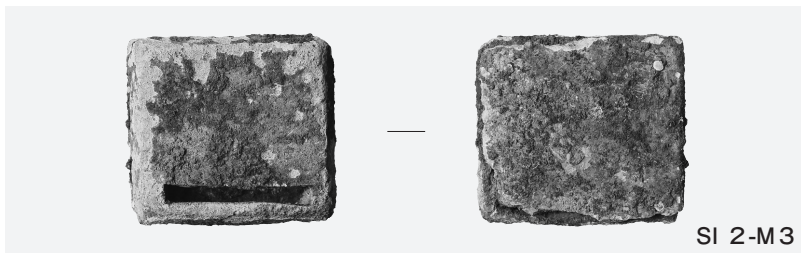


第1号整地跡
確認状況



第2·7·9·10·11号竖穴建物跡，第179·181号土坑出土土器

PL6



第2・4・7・8・10号竖穴建物跡出土土器・金属製品



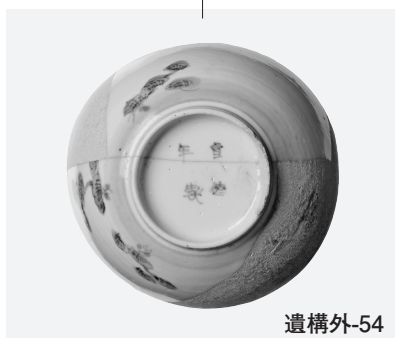
江戸時代遺物集合



SK192-47



SK192-50



遺構外-54



SK192-48



SK192-49



SK222-52



第8号竖穴建物跡，第1号水路状施設，第222号土坑，遺構外出土石器・金属製品・瓦

抄 録

ふりがな	みとじょうあと							
書名	水戸城跡							
副書名	水戸地方検察庁仮庁舎建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第396集							
著者名	盛野浩一							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2015(平成27)年3月16日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
水戸城跡	茨城県水戸市 北見町 1番11号	08201 - 172	36度 22分 40秒	140度 28分 37秒	29m	20131202 ~ 20140131	584㎡	水戸地方検察 庁仮庁舎建設 事業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水戸城跡	集落跡	奈良 平安	堅穴建物跡 堅穴遺構 土坑	10棟 1基 2基	土師器(坏・碗・高台付坏・鉢・甕・甑), 須恵器(坏・高台付坏・蓋・皿・盤・瓶類・甕・甑), 灰釉陶器(長頸瓶), 石器(台石), 金属製品(刀子・鏃・斧・釘・腰帶具), 泥岩			
	家老屋敷	江戸	水路状施設 整地跡 土坑	1条 1か所 2基	土師質土器(小皿・焙烙・手焙り), 陶器(甕), 磁器(碗・小碗), 金属製品(釘・小柄), 瓦(特殊瓦)			
	その他	時期不明	溝跡 土坑	1条 51基	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器, 磁器(碗), 石器(紡錘車), 剥片, 瓦(軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦)			
要約	水戸徳川家の城として知られる水戸城の北三の丸内の調査を行った。調査の結果、奈良・平安時代の集落跡を確認した。平安時代の堅穴建物跡からは、銅製の腰帶具や灰釉陶器が出土しており、那賀郡衙との関わりを伺わせる。また、江戸時代初期のものと考えられる整地跡や、水戸藩の家老屋敷に関わる遺構を確認した。							

印刷仕様

編集 OS Microsoft Windows 7
Home Premium ServicePack1
編集 Adobe InDesign CS6
図版作成 Adobe Illustrator CS6
写真調整 Adobe Photoshop CS6
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
図面類 EPSON ES-10000G
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第396集

水戸城跡

水戸地方検察庁仮庁舎建設事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成27(2015)年 3月13日 印刷

平成27(2015)年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒310-0911 水戸市見和3丁目1528-38

TEL 0120-23-1473